

辻の西遺跡 (第2次調査)

福岡県八女市大字吉田字辻所在遺跡の調査報告

八女市文化財調査報告書 第51集



1998

八女市教育委員会

序

八女市の北部丘陵上には北部九州最大の岩戸山古墳をはじめ、12基の前方後円墳を含む約300基の古墳が存在しており、八女古墳群と呼ばれております。今回調査を実施した地区は、西に乗場古墳、東に善蔵塚古墳に挟まれた丘陵上にあり、極めて重要な地区の一つです。平成元年度の病院建設に先立つ調査によっても弥生時代の集落と墓地、古墳時代の方形・円形周溝墓が発見されております。今回は病院の東側に隣接して平成9年度に老人福祉施設の建設が計画され、建設に先立って調査を実施したものです。発掘調査の実施にあたりまして、医療法人柳育会 理事長 柳 東様におかれましては、文化財保護のため終始御協力いただきました。紙上を借りて感謝申し上げます。

平成10年3月31日

八女市教育委員会

教育長 樋口 欽一

例言

1. 本書は八女市教育委員会が医療法人柳育会 理事長 柳 東氏の委託を受けて実施した福岡県八女市大字吉田字辻所在、辻の西遺跡の第2次調査の報告書である。
2. 辻の西遺跡の発掘調査は昭和63年度調査を第1次、平成9年度調査を第2次調査として八女市教育委員会が主体となり実施した。
3. 本書では紙数の関係で、辻の西遺跡の第2次調査報告を主体とし、第1次調査については概要のみ収録している。
4. 今回の調査で発見された遺構の番号は、第1次調査からの通し番号を用いている。
5. 遺構の実測は参加者で行い、現場写真は赤崎が撮影した。
6. 出土した遺物については、岩戸山歴史資料館で整理を行い、保管している。
7. 本書の執筆、編集は赤崎が行った。

本文目次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	3
3. 発掘調査の概要と経過	3
4. 遺構と遺物	6
5. まとめ	26

1. はじめに

辻の西遺跡は福岡県八女市大字吉田字辻2222-1番地外5筆に所在する。

調査の発端は、医療法人 柳育会（理事長 柳 東）が、当該地5.155m²に老人保健施設を建設する計画がされたことによる。平成8年7月8日に行った試掘調査及び、昭和63年9月から12月に実施した辻の西遺跡第1次の発掘調査で、弥生時代から古墳時代の集落や大規模な墓地群が発見され、多くの遺物も出土している。今回の開発は、辻の西遺跡第1次調査地点の東側隣接地であり、建設前の協議で、当該地にも第1次調査の際発見されたと同様な墓地群が広がっていることが推定され、削平を伴う工事については発掘調査が必要である旨の説明を行った。しかし、建設計画の結果、当該地の大半が削平される事となったため、両者で協議を進め、平成9年度事業として発掘調査を実施する事とし、平成8年11月18日付けで発掘届が提出された。

発掘調査は平成9年4月7日に開始、平成9年7月6日調査は終了した。調査にあたり終始ご協力をいただきました八女リハビリ病院の職員の皆様には感謝申し上げます。

調査関係者は次のとおりである

第2次調査（平成9年4月7日-7月6日）

医療法人 柳育会

理事長 柳 東

八女市教育委員会

教育長 樋口 欽一
教育部長 井上 幸治
生涯学習課長 杉山 信行
生涯学習課参事 森 和良（10月31日まで）
生涯学習課長補佐 下川文比古
兼社会教育係主任
文化財係長 赤崎 敏男（調査担当）
文化財係 大塚 恵治
文化財係 中川寿賀子
文化財係嘱託 山田 朗子

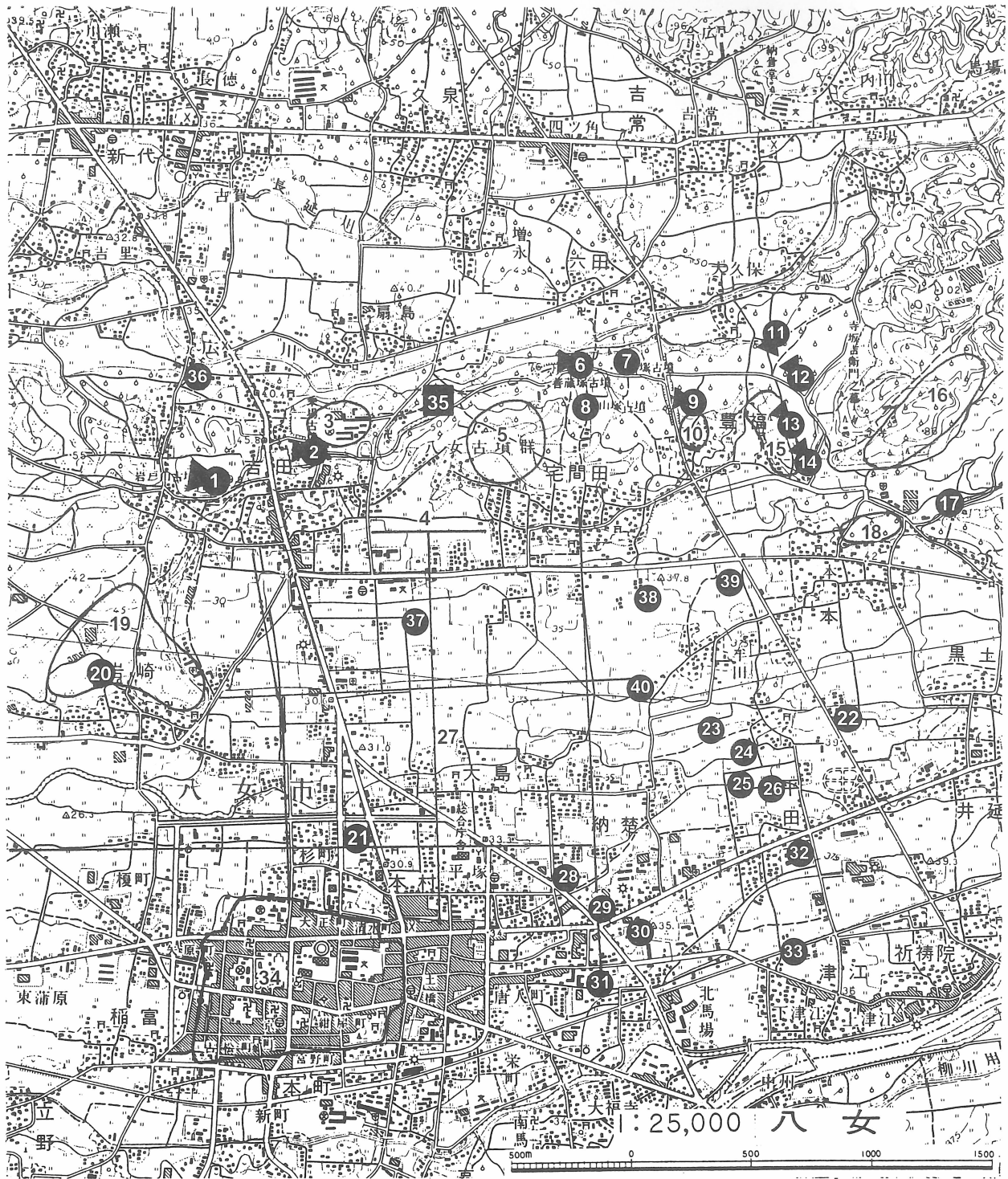
第1次調査（昭和63年9月28日-12月15日）

医療法人 柳育会

理事長 柳 東

八女市教育委員会

教育長 坂田 不二夫
社会教育課長 平嶋 敏章
社会教育課長補佐 杉山 信行
同 係 赤崎 敏男（調査担当）
嘱 託 鹿田 昌宏



第1図 辻の西遺跡位置図と周辺の遺跡 (1/25000)

- 1.岩戸山古墳 2.乗場古墳 3.福島高校遺跡 4.長峰地区条里 5.宅間田遺跡 6.善蔵塚古墳 7.茶臼塚古墳 8.丸山塚古墳
 9.鶴見山古墳 10.鶴見山南・太神宮古墳 11~15.釘崎古墳群 16.鹿子島山古墳群 17.立山山埴輪窯跡 18.本古墳群
 19.岩崎遺跡 20.円墳 21.福島中学校庭遺跡 22.口ノ坪遺跡 23.西原遺跡 24.野内遺跡 25.平田・六反田遺跡 26.北ノ前遺跡
 27.福島地区条里 28.万上田遺跡 29.赤氏遺跡 30.熊野遺跡 31.純土羅石棺・本町遺跡 32.後ノ江遺跡 33.津ノ江遺跡
 34.福島城跡 35.辻の西遺跡 36.神奈無田古墳 37.道手遺跡 38.餅田遺跡 39.枕林遺跡 40.丁ノ坪遺跡

2. 位置と環境 (第1図)

辻の西遺跡の立地する八女丘陵は、地形から見ると西は三潞町西牟田、東を八女市立山付近までを呼んでいるが、古墳群の有様から見ると八女市山内付近までを指している。ほぼ東西にのびる10数キロの八女丘陵上には、岩戸山古墳をはじめ前方後円墳12基を含む約300基にのぼる古墳が存在している。八女丘陵は新生代第四紀系の洪積層を基盤としており、北を広川、南を矢部川によって開析され、現在では脊稜状の丘陵となっている。辻の西遺跡付近の標高は65m前後で、八女丘陵の中でも丘陵幅が最も狭い地点にあたる。

周辺の遺跡を概観すると、八女丘陵上からは、江戸時代に銅矛6本が発見された記録のある向野遺跡は遺跡のすぐ南側と考えられる。西側に隣接した福島高校遺跡からは弥生時代中期の甕棺墓14基と箱式石棺墓2基、岩戸山古墳北側からは吉田石棺群、辻の西遺跡の西側は宅間田石棺群として丘陵上の各所から墳墓群がこれまで発見されている。古墳としては西側400mに乗場古墳(装飾)とそれに続く岩戸山古墳、東側400mに善蔵塚古墳、それに続く鶴見山古墳があり、筑紫君磐井の墳墓とされる岩戸山古墳を中心に、筑紫君一族歴代の墳墓と考えられている前方後円墳群が続いている。円墳として茶臼塚古墳、丸山塚古墳(装飾)、宅間田古墳があり、古墳群として周辺に岩戸山古墳群(3基)、宅間田古墳群(2基)、釘崎古墳群(12基)がある。

八女丘陵の南側に広がる沖積地からは八女東部圃場整備事業に伴う発掘調査によって縄文時代から歴史時代の遺跡が数多く発見されている。西原遺跡では甕棺墓83基、住居跡66軒、方形周溝墓3基。平田・六反田遺跡からは竪穴住居23軒、豪族居館、掘立柱建物3棟。北ノ前遺跡では竪穴住居25軒、掘立柱建物16棟。平田・野内遺跡では弥生時代前期の小環濠、弥生時代、古墳時代の竪穴住居10軒、甕棺墓、石棺墓、土壙墓、石蓋土壙墓など22基。熊野遺跡では、弥生時代を中心として竪穴住居38軒、貯蔵穴、溝、環濠、甕棺墓15基、箱式石棺墓20基、石蓋土壙墓5基、木棺墓3基、方形周溝墓1基が、古墳時代では竪穴式石室を主体部とする古墳1基と竪穴住居2軒が発見されている。隣接する赤氏遺跡からも、弥生時代の竪穴住居、掘立柱建物42軒が発見されている。さらに、平成8年度に調査を実施した高島遺跡から竪穴住居、貯蔵穴、溝と、北西から南東に流れる自然河川が発見され、河川中より多量の土器と石器が出土している。

3. 発掘調査の概要と経過 (第2図)

1. 第1次調査の概要

辻の西遺跡は、昭和31年から41年にかけて一部調査が実施され、竪穴住居、石蓋土壙墓、石棺墓、甕棺墓が発見されている。

第1次の調査は当地に病院(現八女リハビリ病院)が建設される事となったため調査を実施した。調査の結果弥生時代の竪穴住居5軒、掘立柱建物4棟、溝2条、甕棺墓3基、古墳時代の方形周溝墓10基、円形周溝墓5基、弥生・古墳時代の石棺墓5基、木棺墓1基、横口式石蓋土壙墓2基、石蓋土壙墓7基、土壙墓8基が発見された。(第1表)

2. 第2次調査の概要

調査地点は、昭和63年度に調査を実施した地点の東側隣接地であり、当初から第1次調査で発見された遺構が連続するものと考えていた。しかし、第2次調査地点が第1次調査地点より約1m程削平されていたため、遺

構の残り具合が懸念された。

調査は表土と盛土をバックホーで除去し、遺構の検出を行った。調査の結果、丘陵の頂部は削平が著しく、溝の底まで削平が及んでいる部分もある。また、古墳の墳丘は大きく削られ周溝がわずかに残っている状態であった。しかし、南側斜面部は、遺構の残りが良く、弥生時代の甕棺墓、石棺墓、土壙墓、溝、柱穴、古墳時代の古墳、木棺墓、土壙墓、中世の溝が検出された。

3. 調査経過

平成9年4月7日、本日よりバックホーを入れる。調査地区の北側より表土を剥ぐが、削平が著しく遺構は発見されない。

4月8日、調査地区の西側を中心に甕棺、石棺を検出する。

4月9日、甕棺4基、石棺を検出する。

4月10日、本日より作業員を入れ甕棺、石棺の掘り下げを行う。

4月16日、SD06、SD07を掘下げる。近くより水準点を移動する。コンクリート角に64.527mのBMを設置する。

4月22日、SD06、SD07を掘下げを続ける。16号墳の周溝を一部掘下げる。

5月1日、41号墓までの写真撮影、SD06、SD07の土層の写真撮影を行う。

5月2日、本日より実測を開始する。

5月12日、16号墳、SD07掘り下げを続ける。

5月22日、石棺実測、16、17、18号墳周溝掘り下げ完了。44号墓掘り下げる。土師器埴が副葬品として出土する。

5月28日、測量のため基準点を2点設置する。

6月4日、基準点を中心に15mの方眼を設定し実測を開始する。

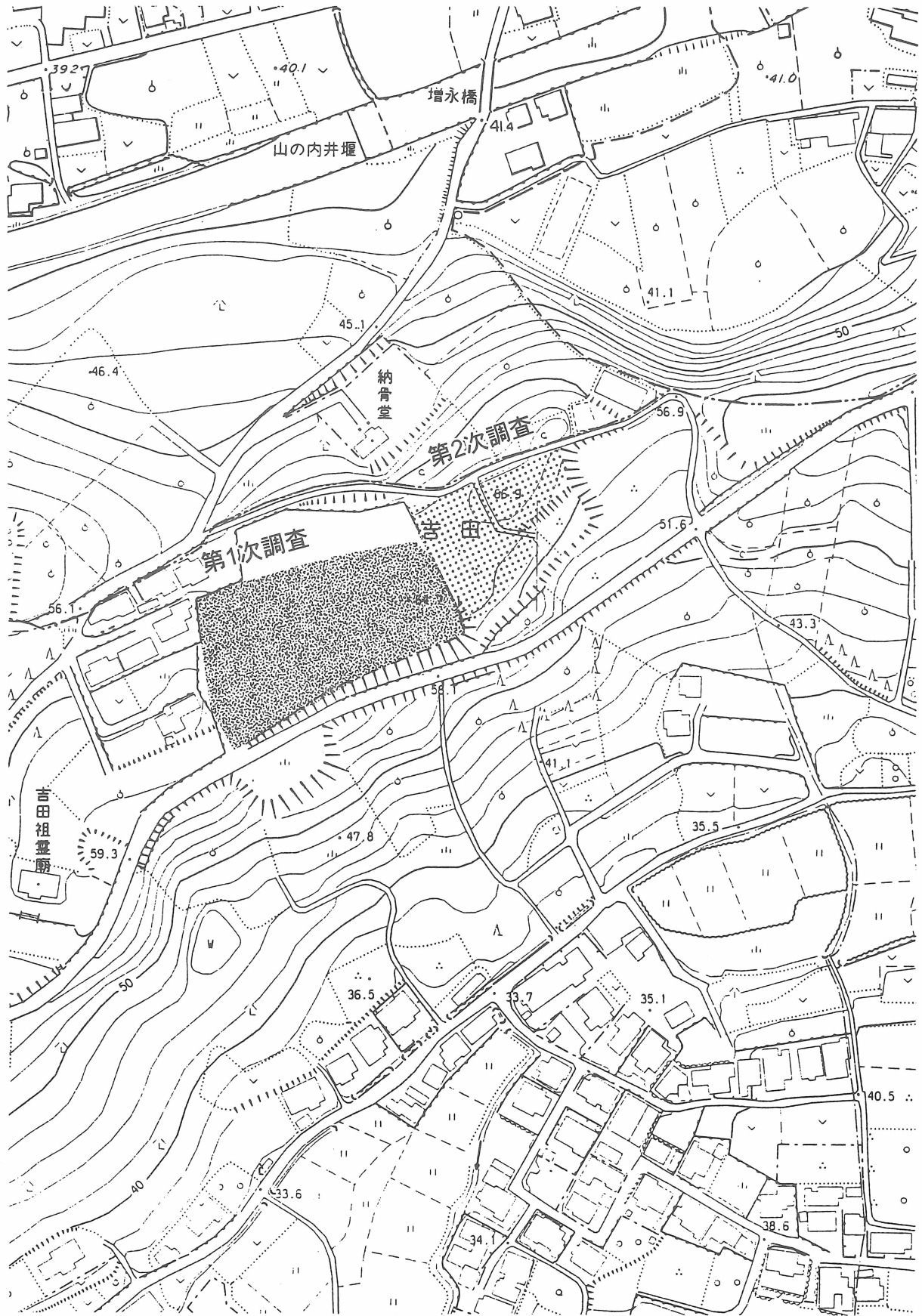
6月11日、全体の実測を続ける。石棺、土壙墓の実測。

6月20日、全体の平面図ほぼ完成、レベルの記入を開始する。実測を続ける。

6月30日、全体の平面図に等高線を記入をする。SD06、07遺物取り上げ後の実測を続ける。

7月1日、SD06、07床面まで掘り下げる。

7月4日、本日にて現地での調査がすべて終了する。図面等の点検後、器材の撤収を行う。



第2図 辻の西遺跡第1次調査・第2次調査位置図 (1/2500)

4. 遺構と遺物 (第3図)

今回の調査は、第1次調査地点の隣接地であったため、弥生時代の墳墓や、古墳時代の方形周溝墓・古墳の発見が期待された。しかし、敷地の東側と南側は大きく削られており茶畑として利用されていたため、敷地面積5.155m²の内、丘陵頂部付近の約3.000m²を調査の対象とした。

調査の結果、弥生時代の甕棺墓9基、石棺墓6基、土壙墓1基、石蓋土壙墓1基、木蓋土壙墓1基、溝1条、柱穴、古墳時代の円墳1基、円形周溝墓2基、石棺墓3基、木棺墓1基、土壙墓2基、中世の溝1条が検出された。

(1) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の墳墓は調査区の西側に集中して18基発見された。これは1次調査の東側で発見されていた23基の甕棺墓、石棺墓、土壙墓、石蓋土壙墓に続くものである。

甕棺墓

調査区の西側に集中して発見された。甕棺墓は表土除去後すぐに検出できたが、茶園や果樹園造成のおり削平されたためか、甕棺の一部だけ残っていたり、甕棺の大半が斜めに削平されているという状態であった。甕棺墓群の分布状況は1次調査の分を併せて考えると、丘陵頂部から南斜面部分に、土壙墓などと伴に主軸をほぼ東西にとり、東西約30m、南北約20mの範囲に帯状に広がっている。甕棺墓はいずれも成人用で小児用は含んでいない。

24号墓 (第4図 1・第5図 1)

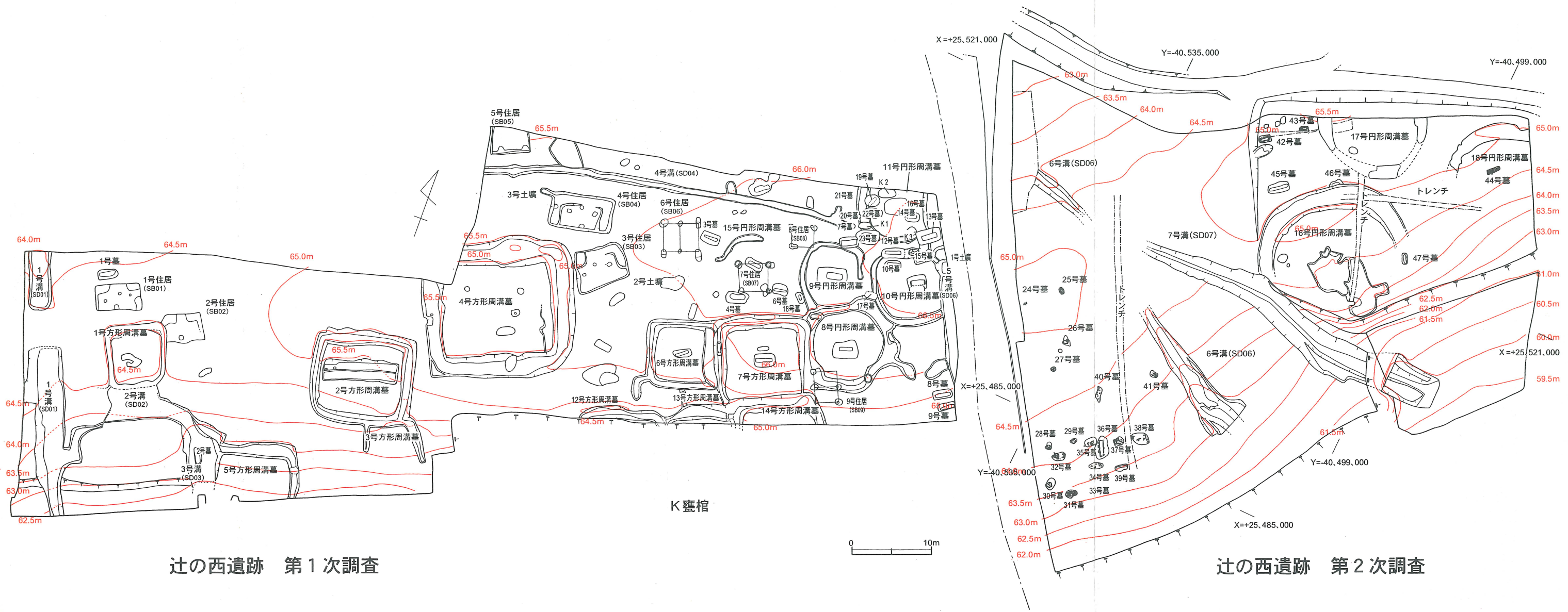
調査区の西端部で発見された。大きく削平を受け、甕棺墓の底部のみかろうじて残っていた状態で、墓壙も確認できなかった。主軸は不明である。甕は底部から見ると大形の甕で、突帯下部の破片である。厚手のつくりで外面は荒いハケ目調整、内面は細かなハケ目調整が施されている。色調は外面が灰茶褐色、内面が茶褐色で外面に黒斑が残る。

25号墓 (第4図 2・第5図 2)

調査区の西端部で24号に隣接して発見された。上半部の削平を受け、甕棺墓の口縁部の一部がかろうじて残っていた。外口径64.0cm、底径10.3cm、器高115.5cmを測り、主軸はN-54°-Wで、埋置角度は不明である。甕は大形の甕で、口縁部の一部と胴部の約半分が残っている。口縁部は「く」の字状となり口縁部のすぐ下に突帯と胴部の上半部に下がり気味の「コ」の字型状突帯を1条巡らし、胴部の上半部にもっともふくらみを持っている。下半部はすばまりながら直径10cm前後の平底に続く。厚手のつくりで外面、内面ともやや荒いハケ目調整が施されている。色調は内面、外面が灰茶褐色で、内面が茶褐色で外面突帯の上下2カ所に黒斑が残る。

26号墓 (第4図 3・第5図 3)

調査区の西端部で27号に隣接して発見された。上半部の削平を受け、甕棺墓の口縁部の一部がかろうじて残っていた。外口径60.8cm、底径8.7cm、器高112.4cmを測り、主軸はN-62°-Eで、埋置角度は41°である。甕は大形の甕で、口縁部の一部と胴部の約半分が残っている。口縁部は「く」の字状となり口縁部のすぐ下に三角形の突帯と胴部のほぼ中央部にやや下がり気味の「コ」の字型状突帯を1条巡らし、胴部の中



第3図 辻の西遺跡第1次調査・第2次調査遺構配置図 [1/500]

辻の西遺跡第1次・第2次 土墳墓、石棺墓

遺構番号	種類	長軸方向	長軸長(m)	短軸長(m)	深さ(cm)	時代	備考	出土遺物
1号	石蓋土墳墓	N-59°E	2.50	1.15	30	古墳	1次 粘土有り	鋤先、砥石
2号	"	N-26°W	2.30		53	"	"	
3号	"	N-86°W	2.35	1.30	95	"	石蓋の裏に朱塗り粘土有	
4号	"	N-77°W	2.85	1.40	50	"	"	
5号	土墳墓	N-84°W	2.10	0.95	55	"	"	
6号	"	N-75°E	2.00	1.30	60	"	"	
7号	"	N-30°E	2.40	1.35	74	弥生	木棺墓(?)	土器
8号	"	N-56°E	2.25	1.30	76	古墳	"	
9号	"	N-52°E	2.00	1.10	96	"	"	
10号	石蓋土墳墓	N-71°E	2.10	1.25	40	"	"	
11号	木棺墓	N-65°E	2.75		85	弥生	10号円形周溝墓の主体部と合体?	
12号	土墳墓	N-67°W	3.50	1.20	76	"	木棺墓(?)	
13号	"	N-56°W	3.10	1.65	96	"	木棺墓(?)	
14号	箱式石棺	N-57°E	1.5+α	1.70	83	"	カケランにより石棺の一部が抜き取られている	
15号	土墳墓(?)	N-39°W	3.30	1.50	100	"	"	
16号	石蓋土墳墓	N-70°E	1.45	1.30	65	古墳	"	
17号	横口式石蓋土墳墓	N-80°E	1.50	0.75		弥生	"	
18号	石蓋土墳墓	N-35°W	1.30	0.90	29	古墳	"	
19号	横口式石蓋土墳墓	N-24°E	1.50	1.50	80	弥生	"	
20号	箱式石棺	N-64°E	1.50	0.90	30	"	粘土有	
21号	"	N-72°E	1.90	0.70	22	"	粘土有	
22号	"	N-68°E	2.10	1.35	40	"	粘土有	
23号	"	N-70°E	2.60		35	"	"	
32号	"	N-65°E	1.45	0.3+α	15	弥生	2次	
33号	土墳墓(?)		1.00	0.25		"	"	
34号	石蓋土墳墓	N-71°E	1.45	0.25	30	弥生	"	
35号	箱式石棺	N-35°E	1.40	不明	50	"	粘土有、36号に東側を切られる	人骨片
36号	"	N-27°W	1.95	0.45	60	"	粘土有 床面一部朱	
37号	"	N-56°E	1.20	0.30	20	"	"	
38号	"	N-64°E	1.60	0.3+α	10	"	"	
39号	木蓋土墳墓	N-59°E	1.45	0.25	25	"	粘土有	
40号	箱式石棺	N-7°W	1.45	0.3+α	15	"	"	
42号	"	N-57°E	1.00	0.25	35	古墳	"	
43号	"	N-67°E	0.52	0.18	30	"	粘土有	
44号	"	N-56°E	1.35	約0.40	45	"	粘土有 18号墳主体部?	
45号	木棺墓	N-53°E	2.55	0.40	30	"	"	土師器の埴
46号	土墳墓	N-56°E	1.20	0.5+α	30	"	16号に切られている	
47号	"	N-20°W	1.15	0.3	45	"	"	

第1表 辻の西遺跡第1次調査、第2次調査遺構一覧表

辻の西遺跡第1次・第2次 甕棺墓

番号	埋置角度	主軸方向	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	最大胴部(cm)	黒斑の有無	備考
K-1	38°	S-67°W	60	9.2	101	69.5		1次
K-2	28°	N-61°E	50.7	10.3	96.1	62		"
K-3	35°	S-20°E	61.8	9.8	98.5	73.5	有	"
24号甕棺	/	/	/	/	/	/	有	2次 突帯部分のみ残る
25号甕棺	/	N-54°W	64	10.3	115.5	74.2	有	"
26号甕棺	41°	N-62°E	60.8	8.7	112.4	70.1	有	粘土有
27号甕棺	59°	N-67°E	/	10.0	(59)	61.5	有	"
28号甕棺	38°	N-15°W	45.5	8.7	92.2	59.2	有	"
29号甕棺	41°	S-55°W	51.6	8.0	104.7	63.4	有	粘土有
30号甕棺	56°	N-58°E	56.1	8.8	93.6	68.6	有	粘土有
31号甕棺(上)	39°	N-65°E	40.6	/	(61.8)	56.6	有	"
31号甕棺(下)	"	"	48.4	10.3	104	62.3	有	"
41号甕棺	/	N-61°W	/	/	/	/	有	胴部一部と突帯部細片のみ残る

辻の西遺跡第1次建物跡(SB)

遺構番号	種類	平面プラン関数	長軸長(m)	短軸長(m)	棟方向	備考
SB 01	竪穴住居	長方形	5.35	3.15	東-西	3角にベッド状遺構付設 入口土壇、桂穴不明
" 02	竪穴	長方形	4.80+α	3.50	"	北2角にベッド状遺構付設 1号方形周溝に切られている、桂穴不明
" 03	竪穴	長方形	6.40	5.00	北東-南西	2本柱・北西側・東側にベッド状遺構付設 入口土壇
" 04	竪穴	長方形	7.55	4.60	東-西	2本柱・西側・東側にベッド状遺構付設 入口土壇、北西角に突出溝(SK03)あり
" 05	竪穴	長方形	5.20+α	3.05+α	"	東側にベッド状遺構付設 南側に壁溝、桂穴不明
" 06	掘立柱建物跡	1×2	4.50	3.50	"	4号石蓋土墳墓に高床を切られている
" 07	掘立柱	1×1	3.90	3.50	"	9号円形周溝に切られている
" 08	掘立柱	1×1	2.50	2.50	不明	
" 09	掘立柱	1×2	3.90	3.10	南-北	8号円形周溝墓・14号方形周溝墓に切られている

辻の西遺跡第1次・第2次 方形周溝墓 円形周溝墓 円墳

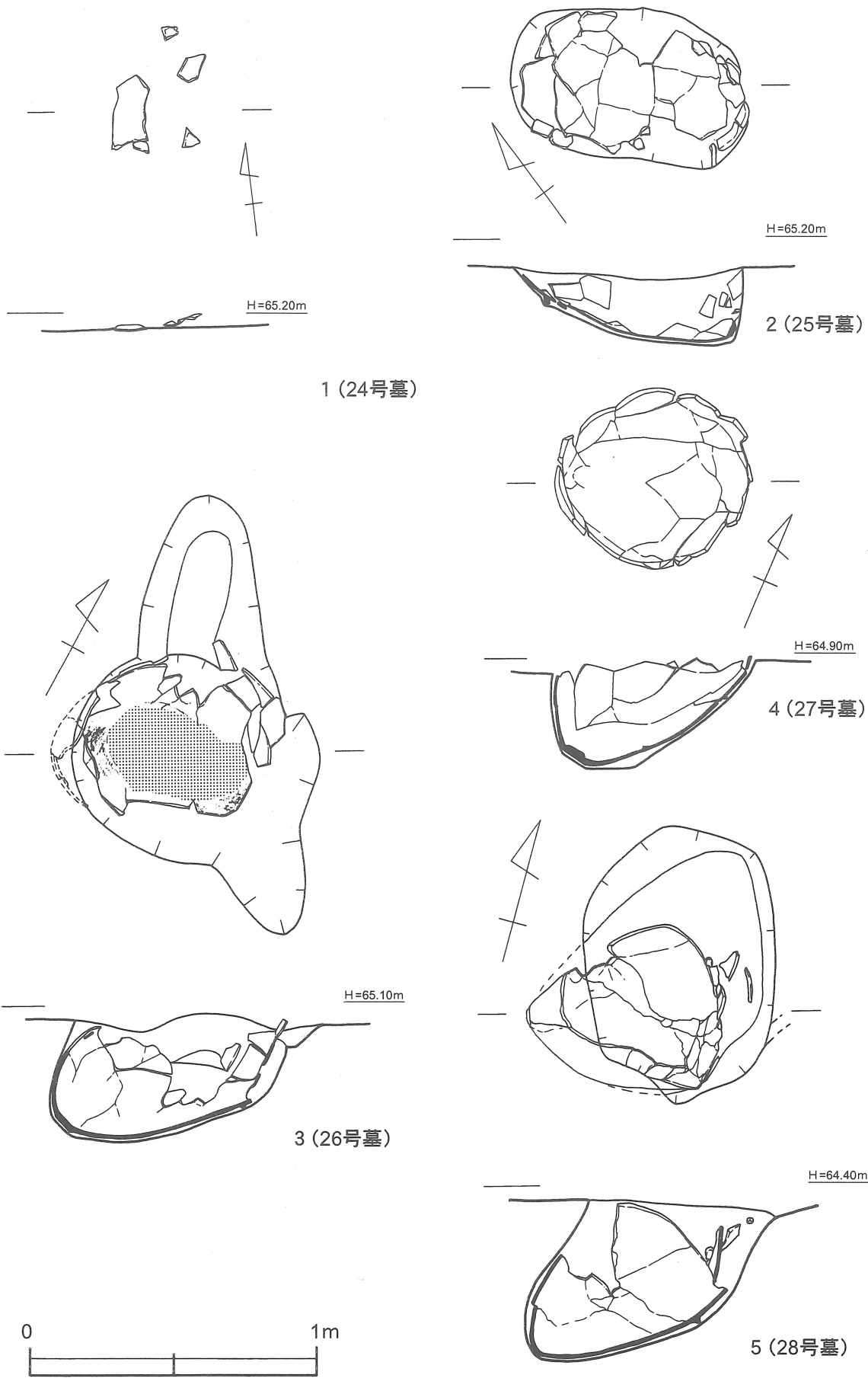
遺構番号	遺構の種類	規模(m)	主体部種類	長軸方向	長軸長(m)	短軸長(m)	深さ(cm)	備考	出土遺物
1号	方形周溝墓	1辺約7.4	不明					1次	
2号	"	" 13.0	"					"	土師器
3号	"	" 7.5	"					"	
4号	"	" 19.4	"					"	壺形土器
5号	"	" 10.0	"					"	
6号	"	" 8.6	箱式石棺	N-49°W	1.8	0.3	30	"	7号を切る 刀子
7号	"	" 11.0	箱式石棺 土壇墓	N-68°W	2.3	0.6	34	粘土有	人骨片
8号	円形周溝墓	直径約11.0	竪穴式石室	N-69°W				"	7号を切る
9号	"	" 8.0	木棺墓	N-82°W				"	8号を切る
10号	"	" 10.0	竪穴式石室	N-71°W				"	8号を切る 粘土有
11号	"	" 10.0	"	N-75°W				"	粘土有 人骨
12号	方形周溝墓	不明	不明					"	
13号	"	1辺約9.0	"					"	
14号	"	" 11.0	"					"	
15号	円形周溝墓	直径約8.0	土壇墓	N-84°E				"	
16号	円墳	"	不明					2次	椀
17号	円形周溝墓	"	"					"	
18号	"	"	箱式石棺(?)	N-56°E	1.5	0.6	45	"	44号箱式石棺は主体部? 粘土有 高杯、甕

辻の西遺跡第1次調査土壇(SK)

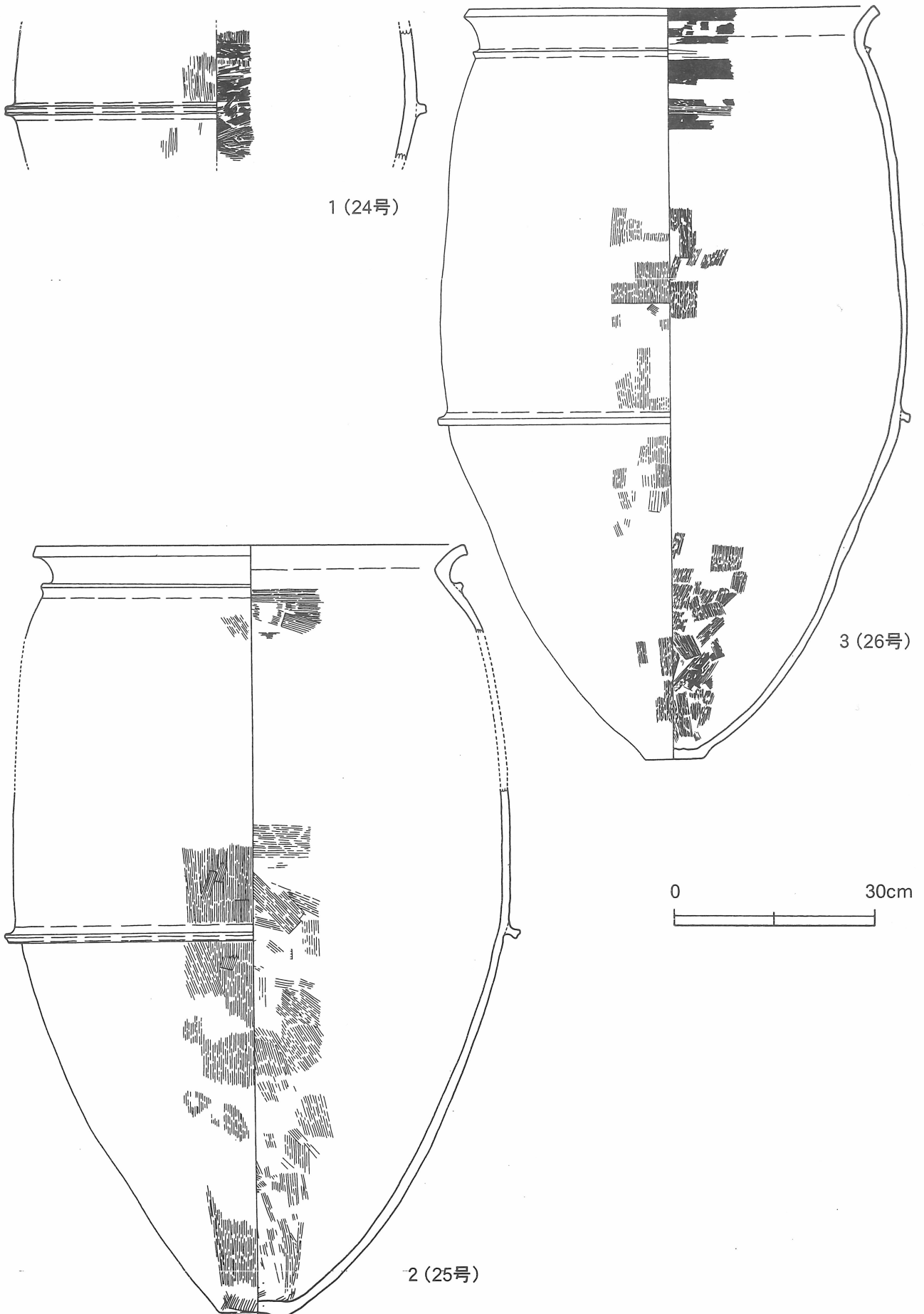
	平面プラン	長軸方向	長軸長(m)	深さ(cm)	備考	出土遺物
01	隅丸長方形	不明	1.5以上	35	SD-05に切られている	
02	"	N-67°E	2.6	59		
03	"	N-86°E	1.9	40	SB04を切っている	須恵器蓋

辻の西遺跡第1次・第2次調査溝(SD)

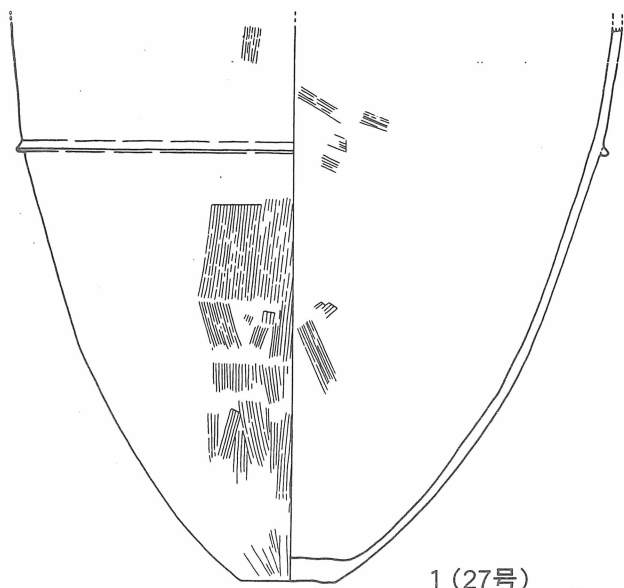
	全長(m)	幅(m)	深さ(cm)	方向	時代	備考	出土遺物
SD-01	約33	1.5~2.3	30~69	北西-南東	弥生	1次	
SD-02	" 15+α	2.0+α	48+α	東-西	"	"	
SD-03	" 6+α	4.0+α	80+α	南-北	"	"	
SD-04	45	0.8~1.0	23~38	東-西	"	"	
SD-05	25+α	4.0+α	28~78	北西-南東	弥生	"	
SD-06	17/9	1.8~3.5	50~150	北西-南東	" (?)	2次	石匙、石核、甕、須恵器片、埴輪
SD-07	40.5	4	150	東-西	中世	2次	高杯



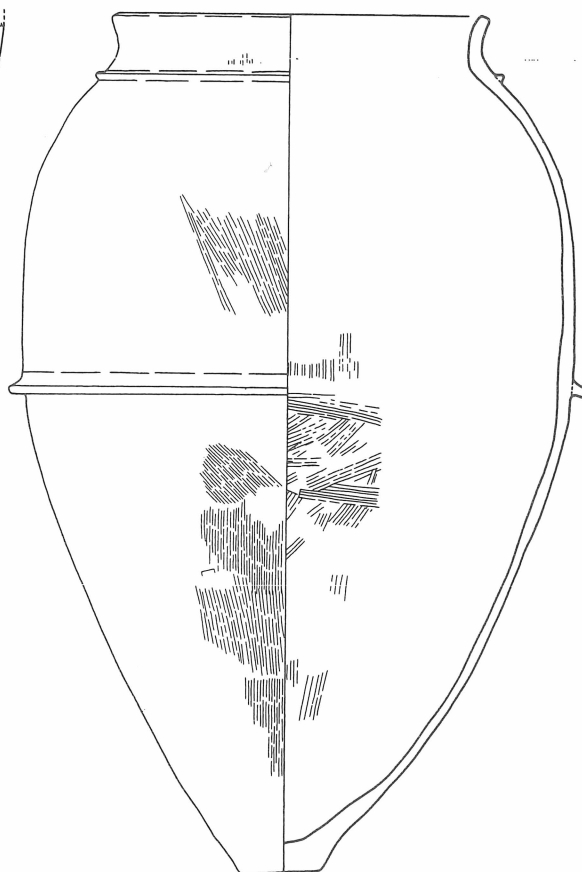
第4図 辻の西遺跡 第2次調査 24・25・26・27・28号甕棺墓 [1/20]



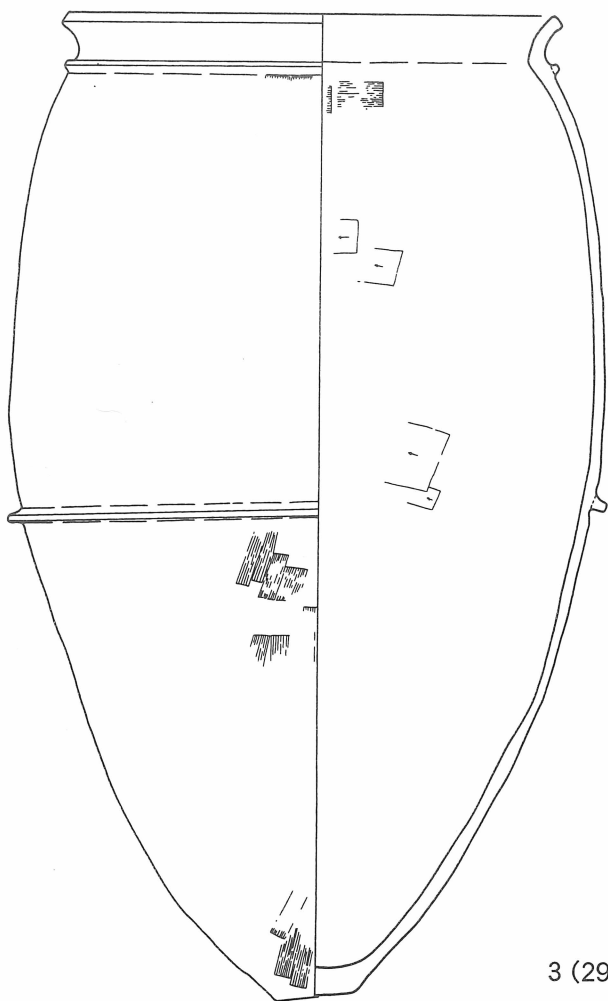
第5図 辻の西遺跡 第2次調査 24・25・26号甕棺 [1/8]



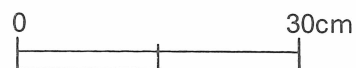
1 (27号)



2 (28号)



3 (29号)



第6図 辻の西遺跡 第2次調査 27・28・29号甕棺 [1/8]

中央部にもっともふくらみを持っている。下半部はすぼまりながら直径9 cm前後の平底に続く。外面は荒いハケ目調整、内面は細かなハケ目調整が施されている。色調は内面と外面が茶褐色で、外面口縁部より突帯下半分の3カ所に黒斑が残る。

27号墓 (第4図 4・第6図 1)

調査区の西端部で26号に隣接して発見された。上半部の削平を受け、甕棺墓の中央部から下部分がかろうじて残っていた。底径10.0 cm、現器高5.9 cmを測り、主軸はN-67°-Eで、埋置角度は59°である。甕は大形の甕で、胴部の約半分が残っている。胴部の上半部にやや細い下がり気味の「コ」の字型状突帯を1条巡らし、胴部の上半部にもっともふくらみを持っている。下半部はすぼまりながら直径10 cm前後の平底に続く。薄手のつくりで外面は荒いハケ目調整、内面は細かなハケ目調整が施されている。色調は外面が灰茶褐色、内面が黄褐色で、外面突帯下に三分の一と、突帯部分に小さな黒斑が残る。

28号墓 (第4図 5・第6図 2)

調査区の西端部で石棺墓や甕棺墓が集中する部分に発見された。上半部の削平を受け、甕棺墓の口縁部の一部がかろうじて残っていた。外口径45.5 cm、底径8.7 cm、器高9.2 cmを測り、主軸はN-15°-Wで、埋置角度は38°である。甕は大形の甕で、口縁部の一部と胴部の約半分が残っている。口縁部はやや直立気味の「く」の字状となり口縁部のすぐ下に三角形の突帯と、胴部の中央部に「コ」の字型状突帯を1条巡らし、胴部の上半部にもっともふくらみを持っている。下半部はすぼまりながら直径9 cm前後の平底に続く。薄手のつくりで内面、外面ともやや荒いハケ目調整が施されている。色調は外面が灰茶褐色、内面が茶褐色で、外面口縁部から底部まで広範囲に黒斑が残る。

29号墓 (第6図 3・第7図 1)

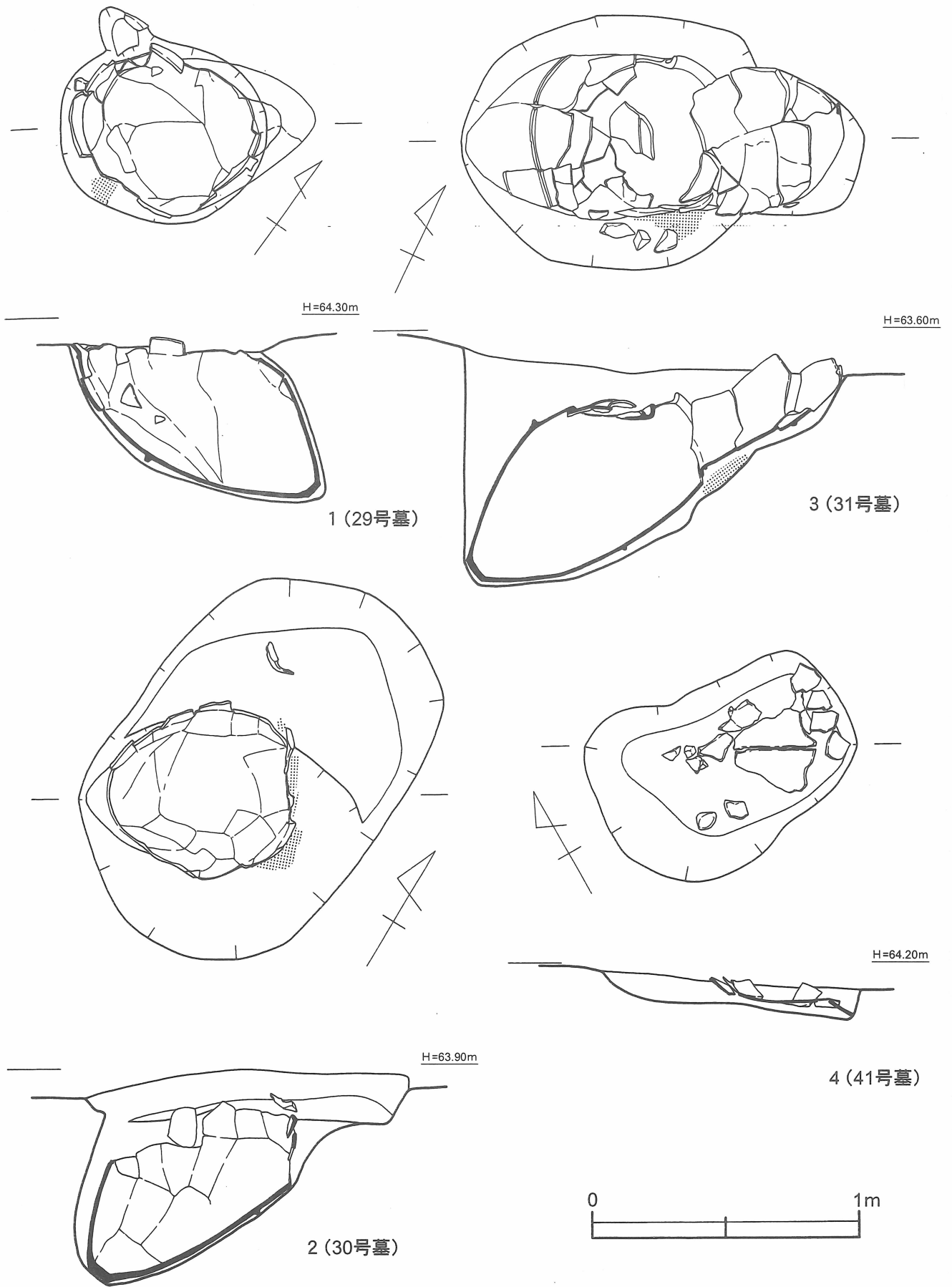
調査区の西端部で28号に隣接して発見された。上半部が削平を受け、甕棺墓の口縁部の大半を欠くが全体が良く残っていた。外口径51.6 cm、底径8.0 cm、器高10.4.7 cmを測り、主軸はS-55°-Wで、埋置角度は41°である。甕は大形の甕で、口縁部の一部と胴部が残っている。口縁部は「く」の字状となり口縁部のすぐ下と、胴部の中央部に「コ」の字型状突帯を1条巡らし、胴部の上半部にもっともふくらみを持っている。下半部はすぼまりながら直径8 cm前後の平底に続く。厚手のつくりで内面、外面ともやや荒いハケ目調整が施されている。色調は外面が黄茶褐色、内面が暗黄茶褐色で外面の広範囲に黒斑が残る。

30号墓 (第7図 2・第8図 1)

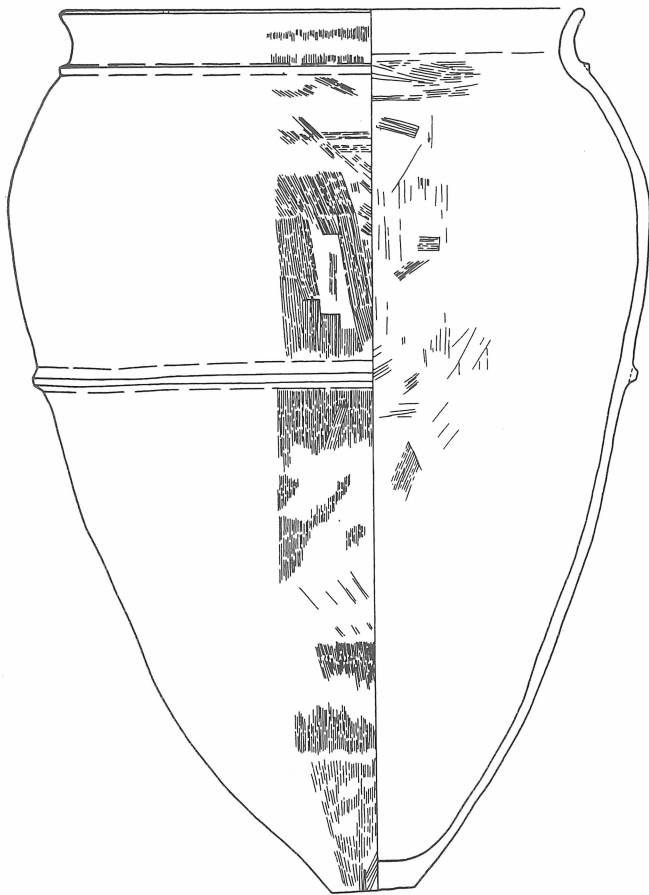
調査区の西端部で31号に隣接して発見された。上半部が削平を受けているが、甕棺墓の口縁部半分と胴部の大半が残っていた。外口径56.1 cm、底径8.8 cm、器高9.3.6 cmを測り、主軸はN-58°-Eで、埋置角度は56°である。甕は大形の甕で、口縁部と胴部の一部を欠く。口縁部は「く」の字状となり口縁部のすぐ下に三角形の突帯と、胴部の上半部に「コ」の字型状突帯を1条巡らし、胴部の上半部にもっともふくらみを持っている。下半部はすぼまりながら直径9 cm前後の平底に続く。厚手のつくりで内面、外面ともやや荒いハケ目調整が施されている。色調は外面が黄茶褐色、内面が暗黄茶褐色で外面の上部から下部にかけてと突帯下の2カ所に黒斑が残る。

31号墓 (第7図 3・第8図 2. 3)

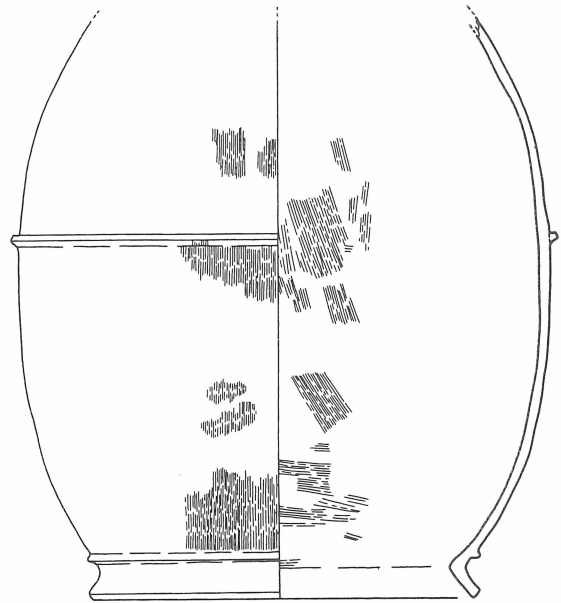
調査区の西端部で30号に隣接して発見された。接合式の甕棺墓で上甕の下半部と下甕の口縁部と胴部の一部が削平を受けていた。主軸はN-65°-Eで、埋置角度は39°である。上甕は外口径40.6 cm、現器高61.8 cmを測る大形の甕で、口縁部と胴部が残っている。口縁部は「く」の字状となり口縁部のすぐ下に三角形の突帯と胴部の上半部に「コ」の字型状突帯を1条巡らし、胴部の上半部にもっともふくらみを持っている。下



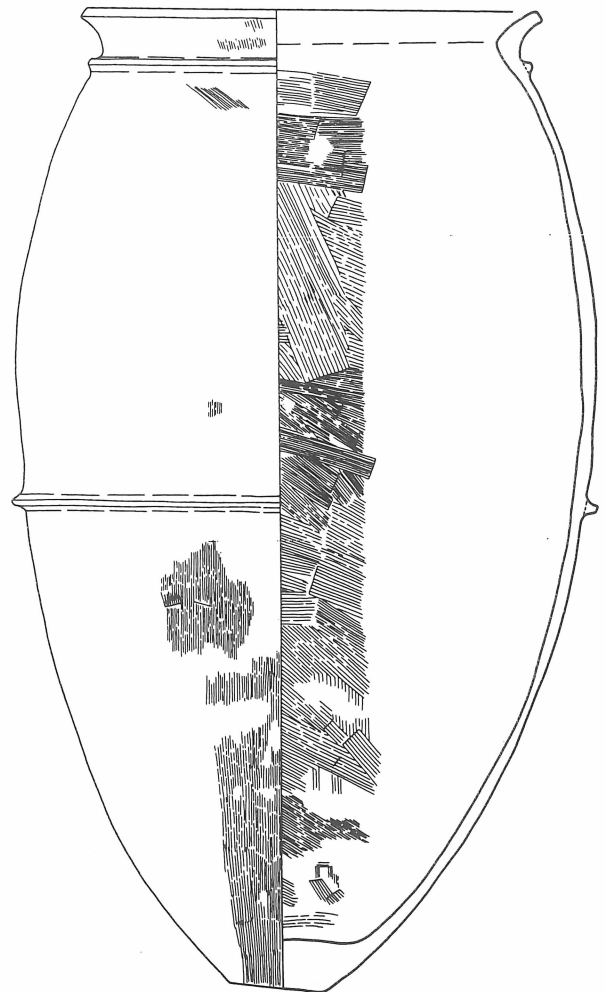
第7図 辻の西遺跡 第2次調査 29・30・31・41号甕棺墓 [1/20]



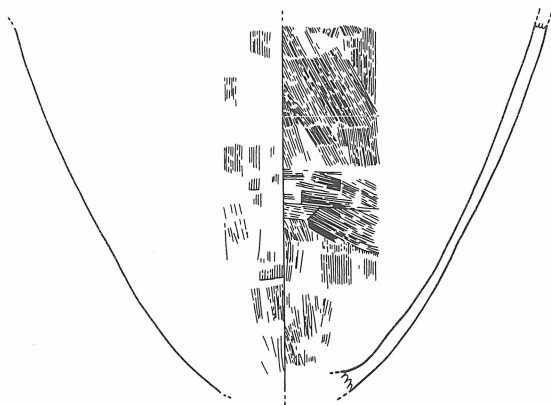
1 (30号)



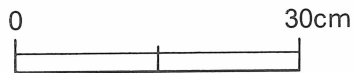
2 (31号上甕)



3 (31号下甕)



4 (41号)



第8図 辻の西遺跡 第2次調査 30・31・41号甕棺 [1/8]

半部はすぼまりながら平底に続くと思われる。厚手のつくりで内面、外面ともやや荒いハケ目調整が施されている。色調は外面が黄茶褐色、内面が茶褐色で外面突帯上3ヵ所に小黑斑が残る。

下甕は外口径48.4cm、底径10.3cm、器高104cmを測る大形の甕で、口縁部と胴部の一部を欠く。口縁部は「く」の字状となり口縁部のすぐ下とに胴部の中央部に「コ」の字型状突帯を1条巡らし、胴部の上半部にもっともふくらみを持っている。下半部はすぼまりながら平底に続く。厚手のつくりで外面は細かなハケ目調整、内面は荒いハケ目と細かな2種類のハケ目調整が施されている。色調は外面が黄茶褐色、内面が暗黄茶褐色で外面の上部から下部にかけて小さな黒斑が4ヵ所残る。

41号墓 (第7図 4・第8図 4)

調査区の西端部で他の甕棺墓よりやや離れて発見された。大きく削平を受け、甕棺墓の胴部の一部がかるうじて残っていた。主軸はほぼN-61°-Wで、埋置角度は不明である。甕は大形の甕で、胴部の一部と胴部突帯片が残っている。胴部の上半部に下がり気味の「コ」の字型状突帯を1条巡らしたものと思われ、胴部の上半部にもっともふくらみを持っている。下半部はすぼまりながら平底に続くと思われる。厚手のつくりで外面はやや荒いハケ目調整、内面は細かなハケ目調整が施されている。色調は外面が淡黄灰色、内面が黄灰色で外面に黒斑が残る。

石棺墓

調査区の西側に集中して発見された。石棺墓は表土除去後すぐに検出できたが、甕棺墓と同様、茶園や果樹園造成のおり削平されたためか、石棺の一部だけが残っているものが多い。石棺墓群の分布状況は1次調査の分を併せて考えると、丘陵頂部から南斜面部分に、甕棺墓や土壙墓などと伴に主軸をほぼ東西にとる場合が多い。

32号墓 (第9図 1)

調査区の西端部で他の甕棺墓と並んで発見された。大きく破壊を受けていたが、石棺墓の両側小口部分がかるうじて残っていた。全長1.45m、幅は不明であるが約0.3mを測る。主軸はほぼN-65°-Eで、石材はすべて緑泥片岩を用いている。遺物は出土しなかった。

35号墓 (第9図 2)

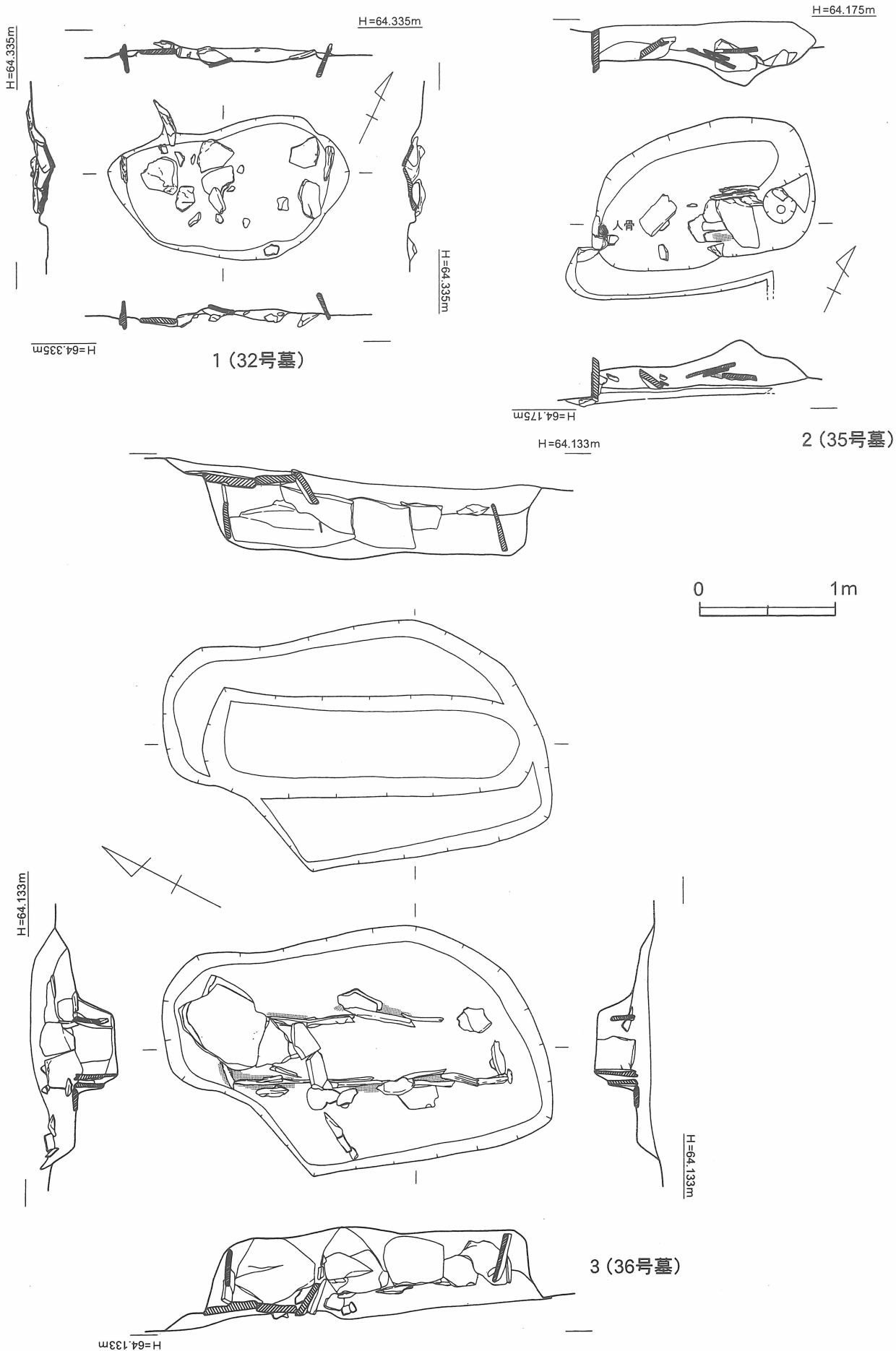
調査区の西端部で他の甕棺墓と並んで発見された。36号墓によって東側部分を削られまた、全体が大きく破壊を受けていたが、石棺墓の片側小口部分がかるうじて残っていた。全長約1.4m、幅は不明である。主軸はほぼN-35°-Eで、石材はすべて緑泥片岩を用いており、白色粘土がわずかに残る。また、西側に残る小口付近より頭骨の一部が発見されたが、遺物は出土しなかった。

36号墓 (第9図 3)

調査区の西端部で他の甕棺墓や石棺墓と並んで発見された。上蓋は破壊を受けていたが、石棺墓内部と両側小口、側壁部が良く残っていた。内法で全長1.95m、幅は北側で0.45m、南側で0.4mを測り北側がわずかに広い。側壁は両壁とも5枚の扁平な石を使用しており、蓋石との目張りには白色粘土を用いる。主軸はほぼN-27°-Wで、石材はすべて緑泥片岩を用いている。床面北側から15cmから25cmの範囲で朱が検出されたが、遺物は出土しなかった。

37号墓 (第10図 1)

調査区の西端部で他の石棺墓と並んで発見されたが、大きく破壊を受けていた。石棺墓の石材も移動しており、全長約1.2m、幅は約0.3m前後と考えられる。主軸はほぼN-56°-Eで、石材はすべて緑泥片岩を用



第9図 辻の西遺跡 第2次調査 32・35・36号石棺墓 [1/40]

いている。遺物は出土しなかった。

38号墓(第10図 2)

調査区の西端部で他の甕棺墓と並んで発見された。大きく破壊を受けていたが、石棺墓の両側小口部分がかろうじて残っていた。全長1.60m、幅は不明であるが約0.3m。主軸はほぼN-64°-Eで、石材はすべて緑泥片岩を用いている。遺物は出土しなかった。

40号墓(第10図 5)

調査区の西端部で他の甕棺墓からやや離れて発見された。大きく破壊を受けていたが石棺墓の北側小口部分がかろうじて残っていた。全長1.45m、幅は不明であるが約0.3mを測る。主軸はほぼN-7°-Wで、石材はすべて緑泥片岩を用いている。北側小口部分にわずかではあるが白色粘土が残っていたが、遺物は出土しなかった。

土墳墓、石蓋土墳墓、木蓋土墳墓

調査区の西側に集中して発見された。土墳墓は甕棺墓、石棺墓と並んで検出できた。その種類は土墳墓1基、石蓋土墳墓1基、木蓋土墳墓1基で甕棺墓と同様、茶園や果樹園造成のおり削平されたためか、一部だけが残っているものが多い。分布状況は1次調査の分を併せて考えると、丘陵頂部から南斜面部に集中し、甕棺墓や石棺墓などと同様に主軸をほぼ東西にとる場合が多い。

33号墓

調査区の西端部で34号墓と並んで発見された、小形の土墳墓と思われ、隅丸長方形を呈している。全長1.00m、幅は0.25mを測る。遺物は出土しなかった。

34号墓(第10図 3)

調査区の西端部で33号墓と並んで発見された、小形の石蓋土墳墓で、二段堀の墓壇は1.80m×0.85mの隅丸長方形で、石蓋部分はすでに除去されており緑泥片岩の残欠が残っていた。墓壇のほぼ中央に棺壇を掘っており、東側小口部分のみに緑泥片岩を用いている。主軸はほぼN-71°-Eで、全長1.45m、幅は東側で0.25m、西側で0.20mを測り、隅丸長方形を呈している。遺物は出土しなかった。

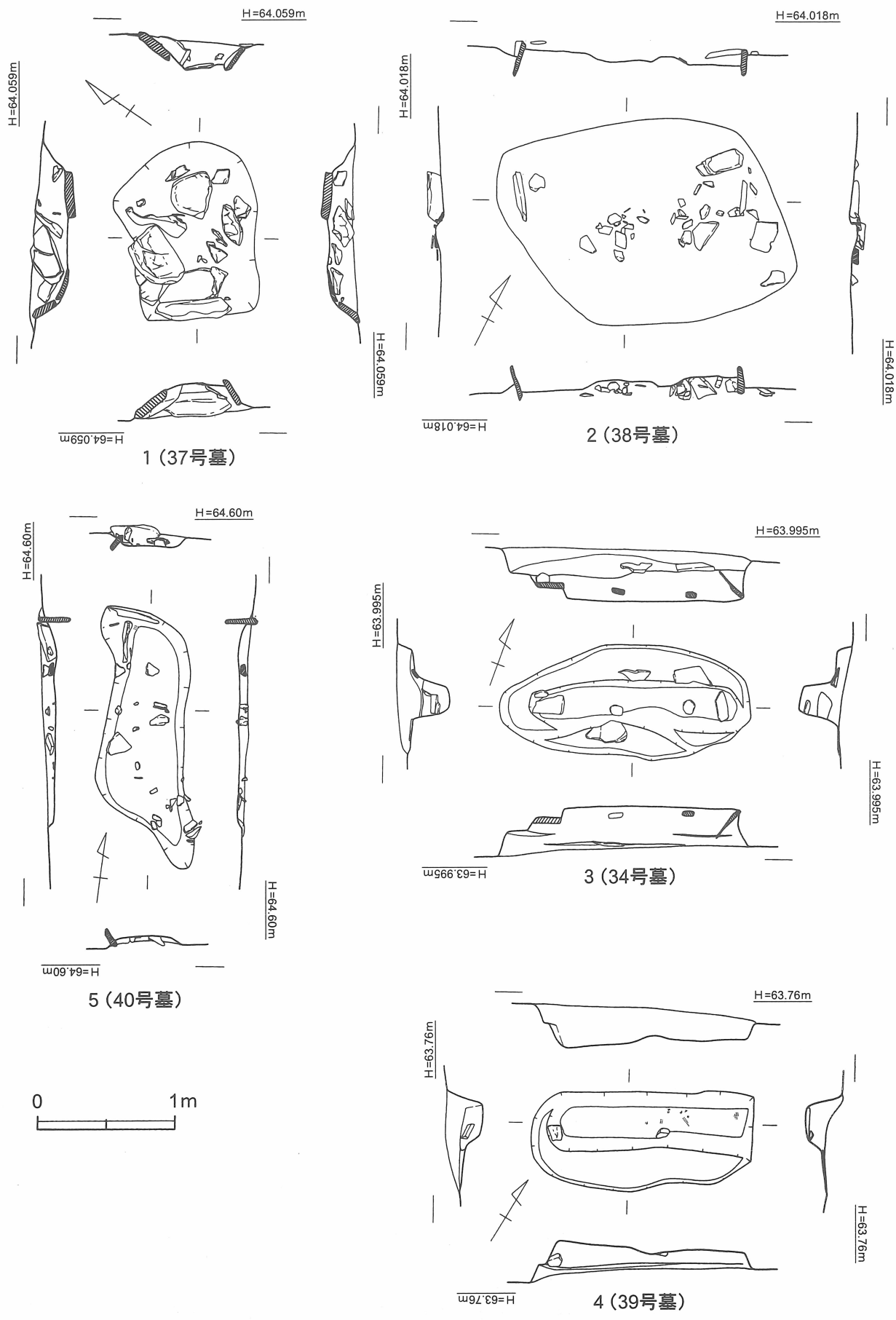
39号墓(第10図 4)

調査区の西端部で33・34号墓と並んで発見された小形の土墳墓で、二段堀の墓壇は1.60m×0.75mの隅丸長方形で、北側に寄っており主軸はほぼN-59°-Eで全長1.45m、幅は東側で0.20m、西側で0.25mの隅丸長方形の棺壇を掘っている。棺底から白色粘土が検出されたため木蓋を用い、目張りに粘土を使用したものと考えられる。遺物は出土しなかった。

溝 S D 0 6

調査区西側の丘陵を横断するように北西から南東方向に走る大溝で、丘陵頂上部は大きく削平を受けている。しかし、南東斜面側は良く残っており約17m分を検出した。幅は広いところで3.5m、深さは1.5mをはかる。北西斜面側はかろうじて残っており約9m分を検出した。幅は広いところで1.8m、深さは0.5mをはかる。

遺物は南東斜面側から検出の溝の中層からからやや多く出土した。



第10図 辻の西遺跡 第2次調査 37・38・40号石棺墓 [1/40]

柱穴

調査区の北端で柱穴4個が確認された。P-1からP-3はかたまっているが、P-4は東側に離れている。P-1からP-3はいずれも一辺約50cmから60cmで、深さも約40cmから60cmの方形を呈している。P-4は長さ1.05m、幅0.8m、深さ20cmで隅丸長方形。いずれも弥生時代の建物の柱穴と考えられるが、全体は不明である。P-1から高杯、P-4から石鏃が出土している。

出土遺物

溝 SD06 出土遺物 (第11図1-14)

土器

甕形土器はいずれも大形の土器で口縁部、胴部、底部の破片である。

(1) 大形の甕で、口縁部の破片である。口縁部は「く」の字状となり口縁部のすぐ下に台形の突帯をを1条巡らす。厚手のつくりで外面はナデ仕上げ、内面はやや荒いハケ目調整が施されている。色調は内外面が黄茶褐色。

(2) 大形の甕で、口縁部の破片である。口縁部は「く」の字状となり口縁部のすぐ下に台形の突帯をを1条巡らす。厚手のつくりで外面は口縁部までナデ仕上げ、突帯より下はハケ目調整、内面は磨滅のため不明。色調は内外面が黄茶褐色。

(3) 大形の甕で、口縁部の破片である。口縁部は「く」の字状となり口縁部のすぐ下に三角形の突帯をを1条巡らす。厚手のつくりで外面は口縁部はやや荒いハケ目調整、内面はやや細かなハケ目調整。色調は内外面が黄茶褐色。

(4) 大形の甕で、胴部の破片である。胴部に巡る突帯は低い台形で幅2.5cm、5条の沈線を巡らす。厚手のつくりで外面はやや荒いハケ目調整が斜め方向に、内面はやや細かなハケ目調整が横方向に施している。色調は内外面が黄茶褐色。

(5) 大形の甕で、口縁部の破片である。口縁部は「く」の字状となり口縁部のすぐ下に丸みを持った三角形の突帯を1条巡らす。厚手のつくりで外面はヨコナデ調整、内面は不明。色調は内外面が茶褐色。

(6) 大形の甕で、口縁部の破片である。口縁部は直立し、口縁部にはやや荒い櫛描波状文を描いている。厚手のつくりで、内面はナデ調整。色調は内外面が茶褐色。

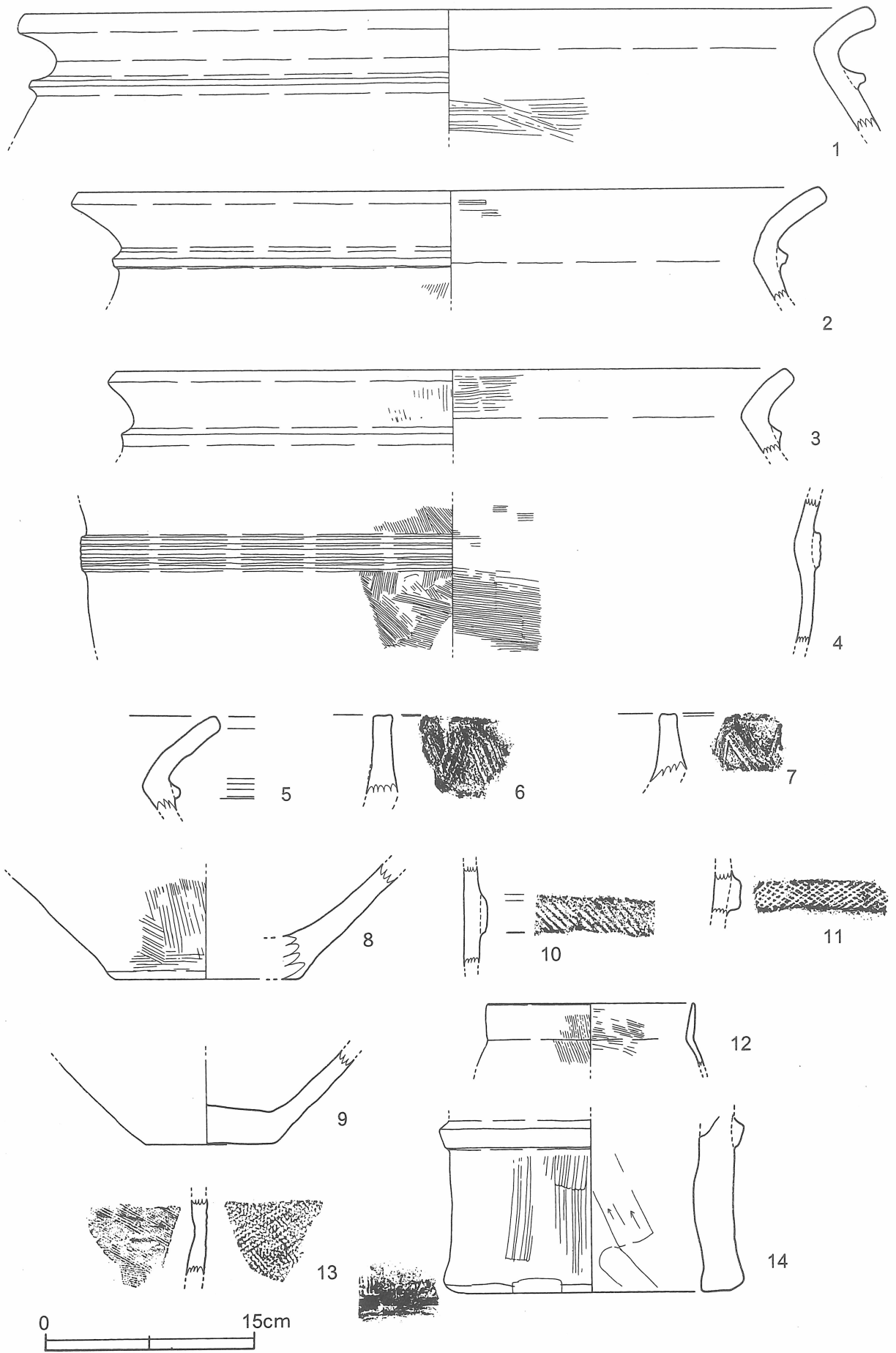
(7) 大形の甕で、口縁部の破片である。口縁部は直立し、口縁部には細かな櫛描波状文を描いている。厚手のつくりで、内面はナデ調整。色調は内外面とも茶褐色。

(8) 大形の甕で、底部の破片である。底部は厚手のつくりで、外面はやや荒いハケ目調整、内面はナデ調整。色調は内外面とも茶褐色。

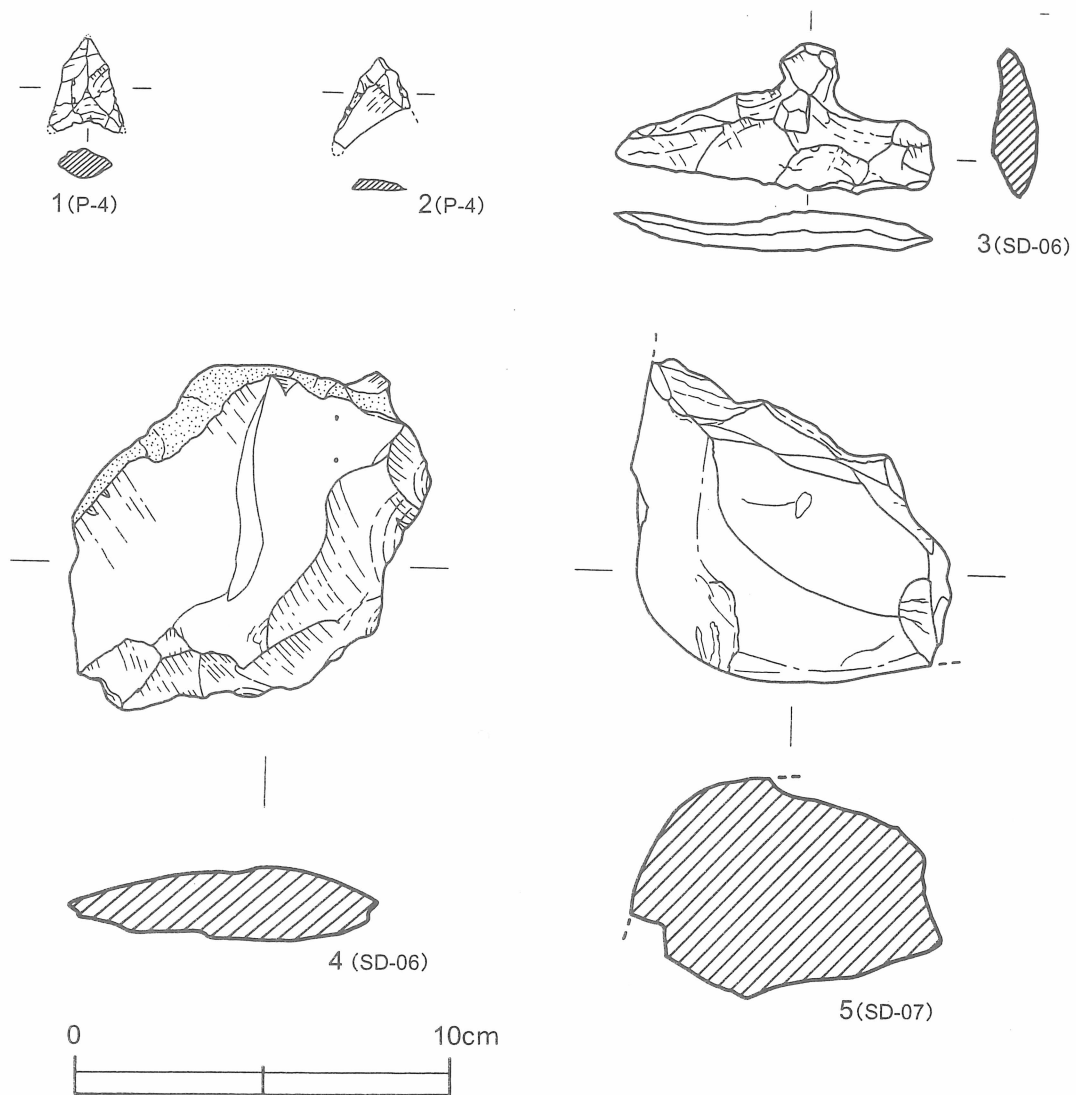
(9) 大形の甕で、底部の破片である。底部は厚手のつくりで、内外面とも調整は不明。色調は内外面とも茶褐色。

(10) 大形の甕の、突帯部の破片である。突帯は低い台形で幅2.0cm、格子目のタタキが施されている。厚手のつくりで、内面ハケ目調整。色調は内外面とも茶褐色。

(11) 大形の甕の、突帯部の破片である。突帯は低い台形で幅2.5cm、格子目のタタキが施されている。厚手のつくりで、内外面ハケ目調整。色調は内外面とも茶褐色。



第11图 溝 (S D-06) 出土土器 [1/4]



第12図 溝 (S D-06-07) 柱穴出土石製品 [1/2]

(12) 壺の、口縁部の破片である。直立する口縁部から、丸味を持った胴部に続く。内外面ハケ目調整。色調は内外面とも茶褐色。

(13) 須恵器甕の、胴部片である。外面は格子目のタタキが施されており、内面ハケ目調整。色調は内外面とも青灰色。

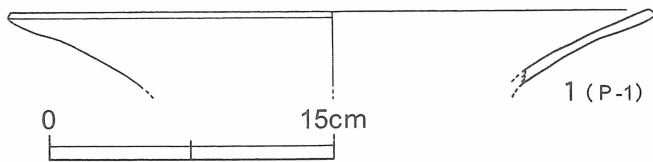
(14) 円筒埴輪の、底部片である。底部から10cmの部分にややくずれた台形の突帯を巡らす。外面は縦方向のやや荒いハケ目調整で底部に布状の圧痕が残る。内面は縦方向のヘラ削りが施されており、底部に指の圧痕が残っている。内外面とも茶褐色で焼成は良い。

石器 (第12図 3.4)

サヌカイト製の石匙と石核が出土した。

(2) 横長の石匙で完形品である。つまみの部分は丸く、大きな剥離で刃部をつくる。

(3) サヌカイトの石核で一部自然面が残る。自然面から大きな剥離を行っている。



第13図 柱穴出土土器 [1/4]

柱穴出土品

土器 (第13図 1)

(1) 高杯の杯部片である。口縁部の直形は3.4 cmで、内外とも調整は不明。胎土には細砂を含み、焼成は不良で黄茶褐色を呈している。

石器 (第12図 1.2)

サヌカイト製の石鏃が2個出土している。

- (1) サヌカイト製の石鏃でほぼ完成品である。比較的大きな剥離を行って石鏃を作っている。
- (2) サヌカイト製の石鏃で一部を欠く。一次剥離面を全体に残し、刃部は細かな剥離を行って石鏃を作っている。

(2) 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の墳墓は調査区の東側に集中して円墳1基、円形周溝墓2基、石棺墓3基、土壇墓2基、木棺墓1基が発見された。

円墳

16号墳

調査区のほぼ中央で発見された。墳丘はすでに大きく削平を受け、主体部についても全く痕跡をとどめていない。わずかに古墳の周りに巡っていた周溝のみ残っていた。

周溝は内側で直径15.5 m、幅2.5 m～3.0 mの周溝が巡り、周溝を含めると19 mの古墳となる。周溝内は暗黒褐色土が堆積していた。周溝内から細片であるが土師器碗が出土した。

円形周溝

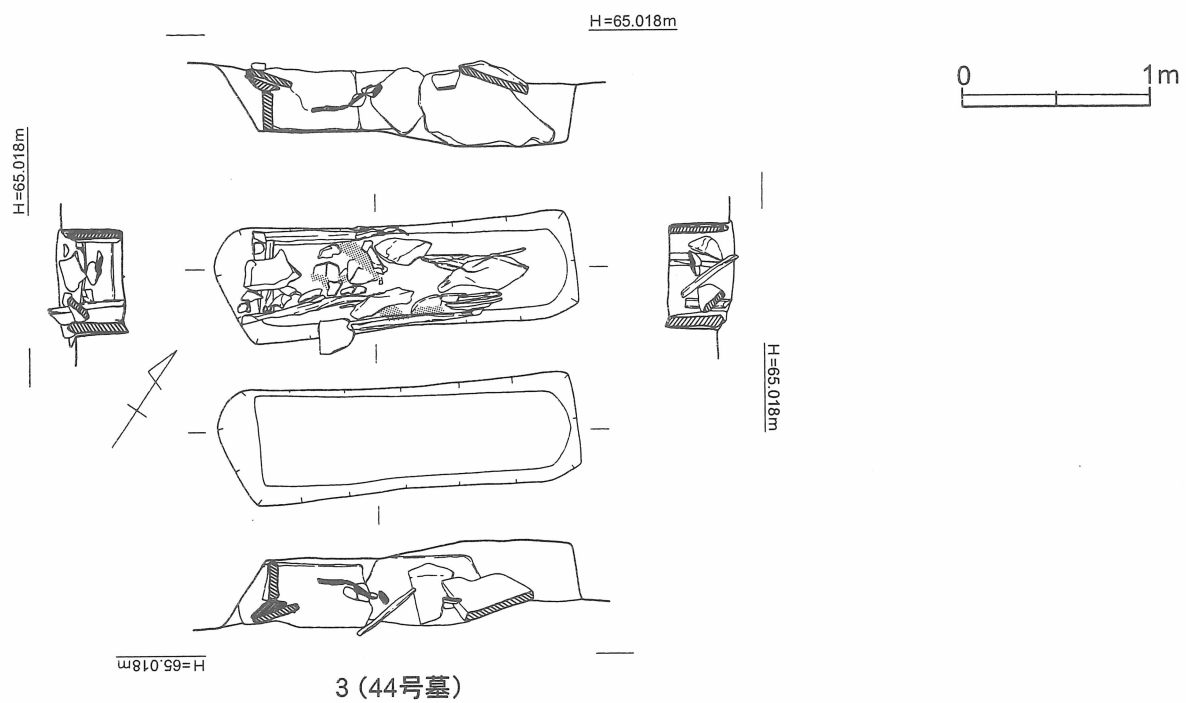
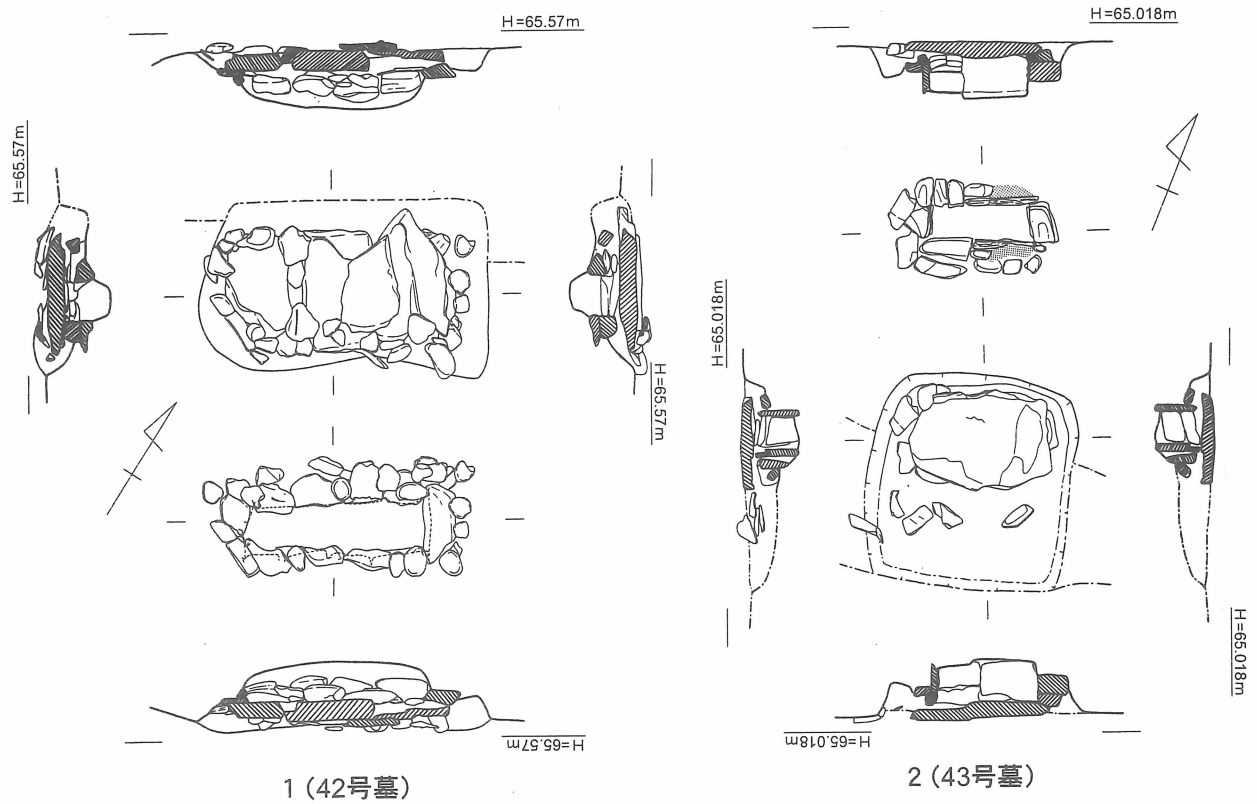
17号墳

調査区の北側で発見され、半分は道路によって削平を受けている。墳丘はすでに大きく削られを、主体部についても全く痕跡をとどめていない。わずかに古墳の周りに巡る周溝の一部のみ残っていた。

周溝は内側で直径11.0 m、幅約2 m前後の周溝が巡り、周溝を含めると13.5 mの古墳となる。周溝内は暗黒褐色土が堆積していた。周溝内から遺物は出土しなかった。

18号墳

調査区の東側で発見された。墳丘はすでに大きく削平を受け、わずかに古墳の周りに巡っていた周溝のみ残っていた。



第14図 辻の西遺跡第2次調査 42・43・44号石棺墓 [1/40]

周溝は復元すると内側は攪乱が著しいため不明であるが幅約1.5m前後の周溝が巡り、周溝を含めると直径約1.3mの古墳となる。周溝内は暗黒褐色土が堆積していた。周溝内から細片であるが土師器が出土した。また、周溝南側ではほぼ中心にある44号墓（石棺墓）は18号墳の主体部となる可能性がある。

石棺墓

42号墓（第14図 1）

調査区の北端部で43号墓と並んで発見された、小形の石棺墓で、掘り方の一部に攪乱を受けていたが、石棺は未発掘の状態であった。石棺墓の蓋石は3枚の緑泥片岩が使われており、蓋石の周辺を拳大の河原石や緑泥片岩片で覆っている。両小口は大きめの河原石が用いられ、側壁は河原石を一段又は二段に使用しており、わずかではあるが、ひかえ積みも見られる。全長1.00m、幅は0.25mを測る。主軸はほぼN-57°-Eで、遺物は出土しなかった。

43号墓（第14図 2）

調査区の北端部で、42号墓と並んで発見された小形の石棺墓で、掘り方の南側が攪乱を受けていたが、石棺は未発掘であった。石棺墓の蓋石として50cm×75cmの大きさの緑泥片岩が1枚使われている。東側小口は大きめの河原石の上に偏平石が、西側小口は緑泥片岩の板石を1枚立て、その上に偏平石が1枚用いられる。側壁は緑泥片岩の板石を2枚立てその上に偏平石を一段又は二段に平積みしている。東側の蓋石下には目張り用の白色粘土が残っている。全長0.52m、幅は0.18mを測る。主軸はほぼN-67°-Eで、遺物は出土しなかった。

44号墓（第14図 3）

調査区の東端部で1基だけ離れて発見された。蓋石はすでに除かれており、横からつぶれた状態であったが、石棺墓内部と西側小口、側壁部が良く残っていた。内法で全長1.35m、幅は西側で0.45m、東側で約0.3mを測り西側が広い。側壁は両壁とも3枚の偏平な石を使用しており、蓋石との目張りには白色粘土を用いている。また、南側側壁の一部にベンガラが塗布されている。主軸はほぼN-56°-Eで、石材はすべて緑泥片岩を用いている。遺物は出土しなかった。

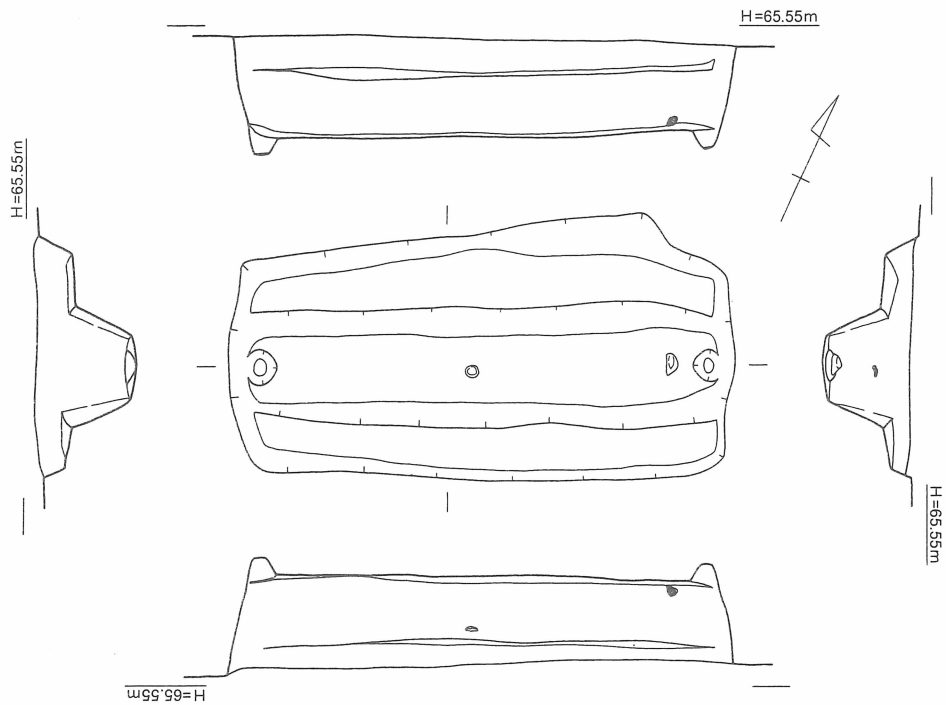
土墳墓

46号墓（第15図 2）

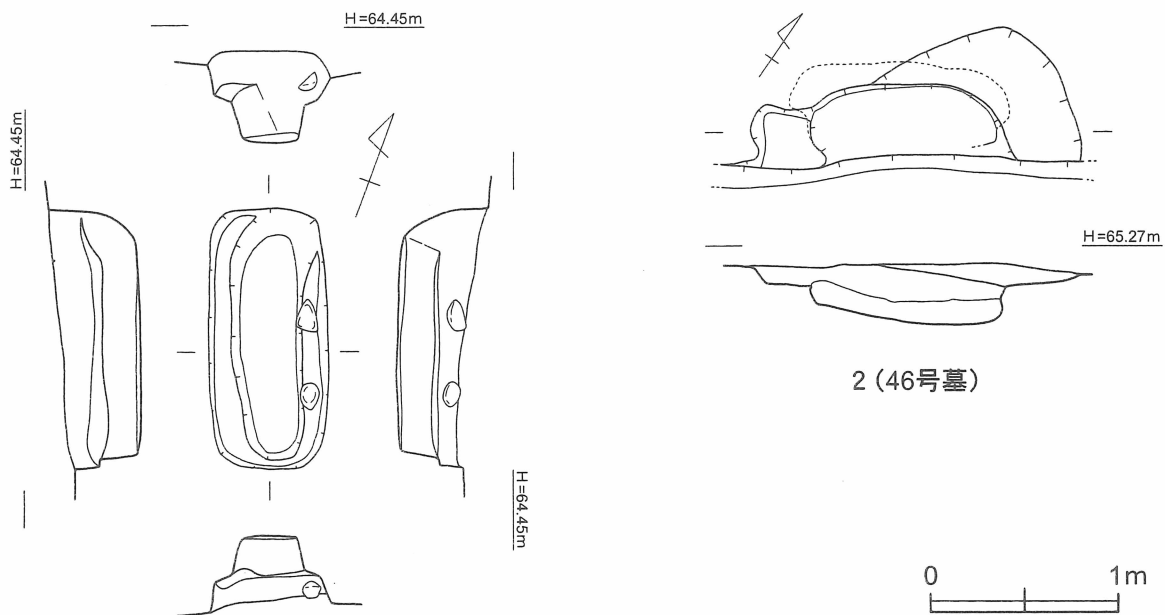
調査区の中央部で発見された。一部を16号墳の周溝によって壊されているが、小形の横口式の土墳墓で、掘り方は全長1.00m、幅は0.35m+ α 以上の隅丸長方形で、地山下0.15m程内側に入った部分に墳底の中心があり、全長1.20m、幅は0.5m+ α 以上を測り、隅丸長方形を呈している。主軸はほぼN-56°-Eで、遺物は出土しなかった。

47号墓（第15図 3）

調査区の東端部で16号墳の周溝の底部に当たる部分で発見された土墳墓で、二段堀の墓壇は1.40m×0.65mの隅丸長方形で、蓋部分に2個の河原石が発見されており、木蓋を押さえたものと考えられる。墓壇のほぼ中央に棺壇を掘っており、主軸はほぼN-20°-Wで、全長1.15m、幅は北側で0.30m、南側で0.25mを測り、隅丸長方形を呈している。遺物は出土しなかった。

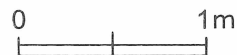


1 (45号墓)

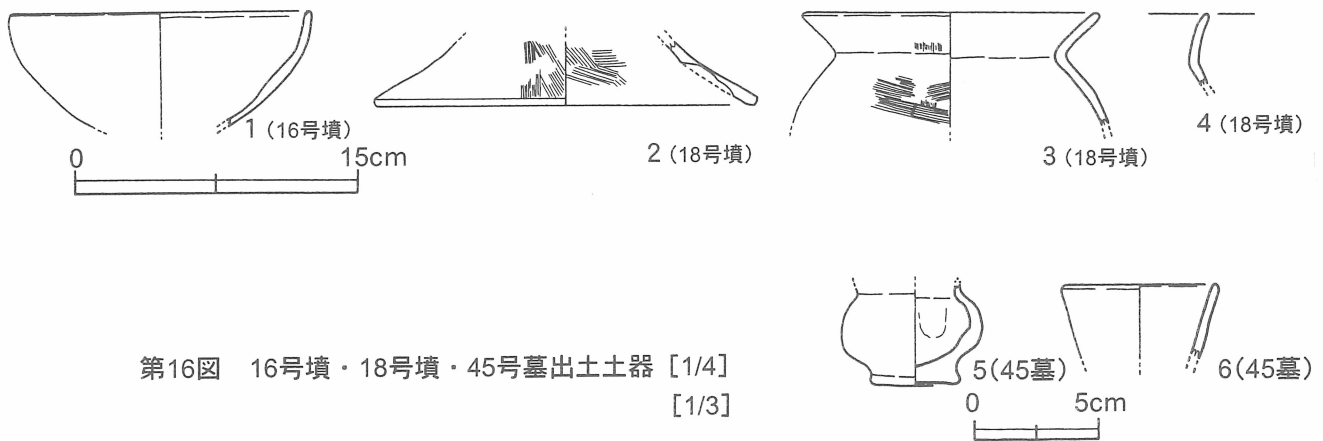


2 (46号墓)

3 (47号墓)



第15図 辻の西遺跡第2次調査 45号木棺墓 45号・46号・47号土壇墓 [1/40]



第16図 16号墳・18号墳・45号墓出土土器 [1/4]
[1/3]

木棺墓

45号墓 (第15図 1)

調査区の西端部で16号墳の北側に発見された大形の木棺墓で、主軸はほぼN-53°-Eで、二段堀の墓壇は2.770m×1.10-1.35mの長方形で、中央部に全長2.55m、幅は東側で0.40m、西側で0.35m、深さ0.30mの長方形の棺壙を掘っている。棺底の両端に直径20cmのピットが検出され木棺の小口部分とも考えられる。東側の棺底からはから緑泥片岩の小片が発見された。遺物は棺壙のほぼ中央で、棺底から約25cm浮いた部分から土師器甗が出土した。

出土遺物

16号墳の周溝から土師器碗が、18号墳の周溝から土師器高杯、甗2点が、45号墓から土師器甗が2点出土した。

土器 (第16図 1-6)

土師器

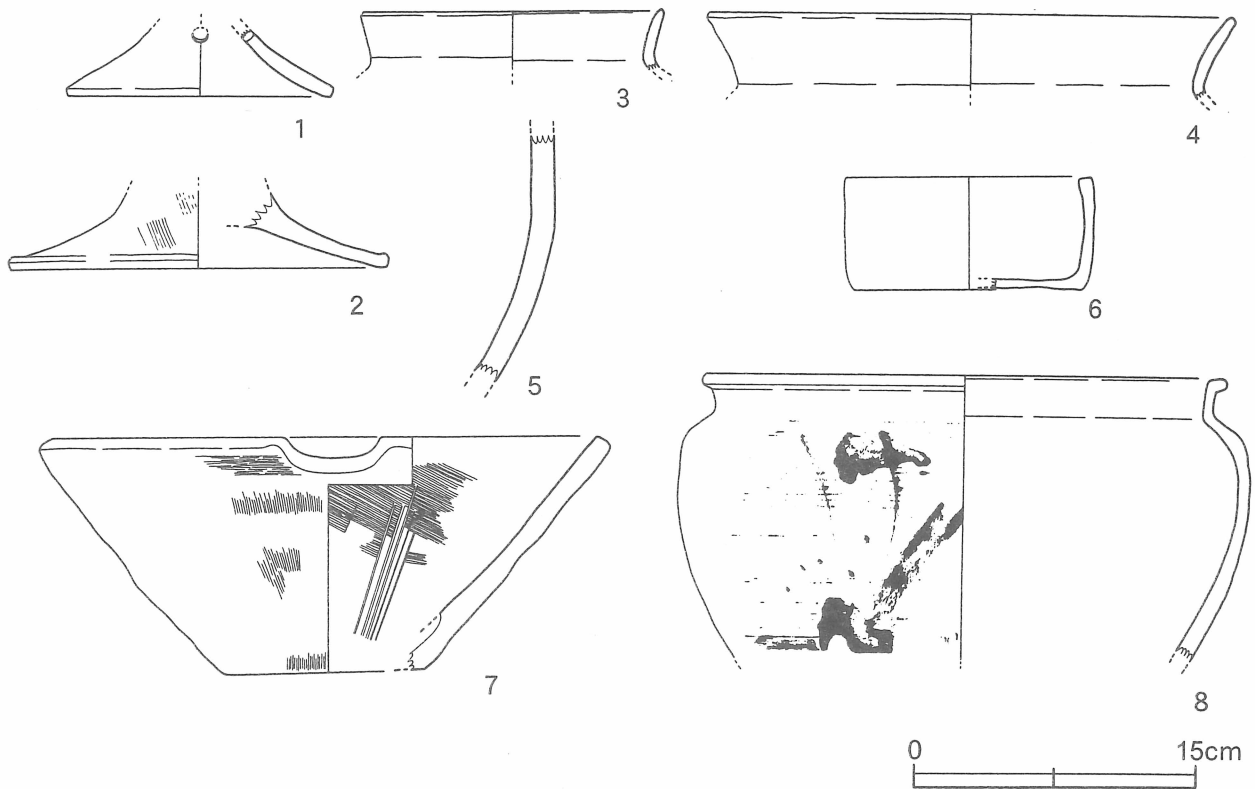
(1) 碗の口縁部から胴部の破片である。口縁部の直径は16.0cm、高さ約6.5cmで、直立する口縁から丸みを帯びた胴部が残る。内外面の調整は不明。胎土にはわずかに砂を含み、焼成は良く茶褐色を呈している。

(2) 高杯の脚部片である。脚部の直径は20.0cm、外に大きく広がる。内外面ともハケ目調整。胎土にはわずかに砂を含み、焼成は良く黒褐色を呈している。

(3) 甗片で口縁部と胴部の一部である。口縁部の直径は16.0cmで、外方へ「く」の字状に伸びる口縁と、丸みを帯びた胴部が特徴である。外面は細かなハケ目調整、内面はヘラケズリで調整が行われ、内面一部に丹塗の痕が残る。胎土には砂を余り含まず、焼成は良くで黄褐色を呈している。

(4) 甗片で口縁部の一部が残る。口縁部の直径は不明。外面はハケ目調整、内面は不明。胎土には砂を余り含まず、焼成は良く内外とも黒褐色を呈している。

(5) 小形で手づくねの甗で完形品である。口縁部の直形は4.0cm、高さ4.0cmで、短くて直立する口縁と、平底の厚い底部が特色である。外面はナデ調整、内面はナデ調整が行われ一部に指痕が残る。胎土には大粒



第17図 溝(SD07) 出土土器 [1/4]

の砂を含み、焼成は良くで黄褐色を呈している。

(6) 小形の罎の口縁部片である。口縁部の復元直径は6.2cmで、短くてやや外側に開く。内外面ともは調整は不明。胎土には砂を含み、焼成は良くなく茶褐色を呈している。

(3) 中世の遺構と遺物

中世の溝が丘陵を断ち切るように1条が検出された。

溝 SD07

調査区西側の丘陵を断ち切るように西から東方向に走る大溝で、丘陵頂上である西側は大きく削平を受けている。しかし、東斜面側は良く残っており、全長約40.5m分を検出した。幅は広いところで4m前後、深さは1.5mをはかる。しかし、大溝の東端部側は、階段状の削平によって大きく削られている。溝内土の堆積状況は、全体が底部からかろうじて約0.4m前後堆積しているに過ぎず、上部に堆積している埋土は果樹園造成時の物であり、造成前は空溝として道等に利用された痕跡が見られる。遺物は溝の下層から土師器と須恵器が、堆積土の上面から片口鉢、陶器片、煙管の雁首部分が出土した。

出土遺物

土器 (第17図 1-8)

(1) 土師器高杯の脚部の破片である。底部径は14.0cm脚部の中程には穿孔が見える。内面はナデ調整、外面の調整は不明。胎土にはわずかに砂を含み、焼成は良く、外面は茶褐色、内面は黒色を呈している。

(2) 土師器高杯の脚部の破片である。底部径は20.0cm。内面はナデ調整、外面の調整は不明。胎土やや多く砂を含み、焼成は良く暗茶褐色を呈している。

(3) 土師器甕の口縁部片である。直径は16.0cmで、外側に開く。内外面ともは調整は不明。胎土にはわずかに砂を含み、焼成は良くで淡茶色を呈している。

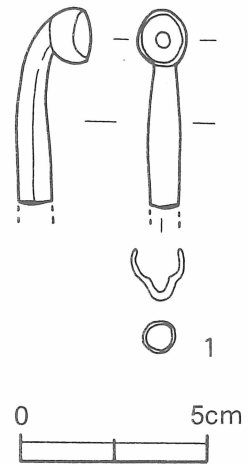
(4) 土師器甕の口縁部片である。直径は28.0cmで、外側に開く。内外面ともは調整は不明。胎土にはやや多く砂を含むが、焼成は良く暗茶褐色を呈している。

(5) 陶器の甕の胴部片である。大甕と思われる。外面は褐釉が薄くかけられる。内面は自然釉が残る。胎土にはわずかに砂を含み、焼成は良く茶褐色を呈している。

(6) 土師器質の碗である。直径は13.0cm、高さ6.0cmで、口縁は直立する。底部は平坦で、内外面とも口縁部はヨコナデ胴部から下はナデ調整。胎土は砂を含まず、焼成は固い焼で茶褐色を呈している。

(7) 須恵器質の片口の摺鉢である。口縁径は29.0cm、高さ12.5cmで、外側に大きく開き一方に片口が付く。内部は細かなハケ目調整が行われスリ目が刻まれている。外面も細かなハケ目調整が行われている。胎土にはやや細砂を含むが、焼成は良く暗灰褐色を呈している。

(8) 陶器の壺の口縁部から胴部片である。直径は28.0cmで、外面は白い釉薬上に飴釉と緑釉で大柄の花文を描いている。内面は口縁部まで白い釉薬をかけ胴部に釉薬のたれが見られる。ナデ調整が行われる。胎土は精製されており、焼成は良く赤褐色を呈している。



第18図 溝 (S D-07)
出土金属製品 [1/2]

金属製品 (第18図 1)

(1) 堆積土の上層から出土した煙管の雁首で、長さ5.2cmで完形品である。

5. まとめ

第1次、及び第2次調査の結果、弥生時代から古墳時代を中心として、歴史時代までの遺構や遺物が発見された。弥生時代の遺構として竪穴住居5軒、掘立柱建物4棟、溝、甕棺墓12基、箱式石棺墓、土壇墓、石蓋土壇墓、木棺墓がある。いずれも弥生時代後期前半のものであり、この時期に、八女丘陵上が生活の場や墓地として利用されていたことがわかった。古墳時代の遺構として方形周溝墓10基、円形周溝墓7基、円墳1基、土壇墓、石蓋土壇墓、木棺墓があり、出土遺物から方形周溝墓は4世紀前半代、円形周溝墓は5世紀前半代と考えられ、墳墓の形が方形周溝墓から円形周溝墓へ変化した様子が見られる。また主体部も弥生時代からの伝統を受け継ぐ箱式石棺墓や土壇墓から小竪穴式石室に変化した事が判明した。方形周溝墓や円形周溝墓の発見により、これまで謎とされていた4世紀から5世紀にかけての、八女丘陵上での墳墓の在り方の解明に大きな成果を上げることができた。

圖 版

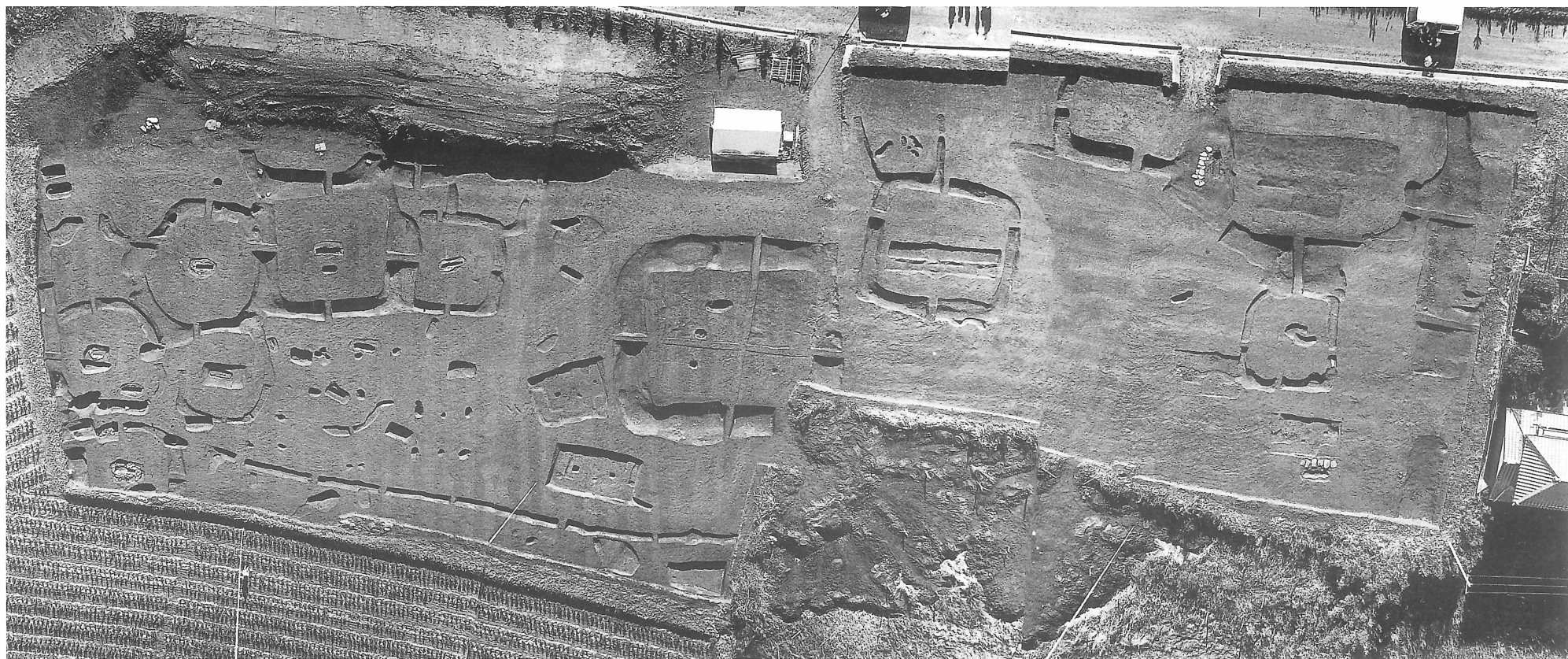
図版 1



(1) 辻の西遺跡第2次調査発掘前 [西より]



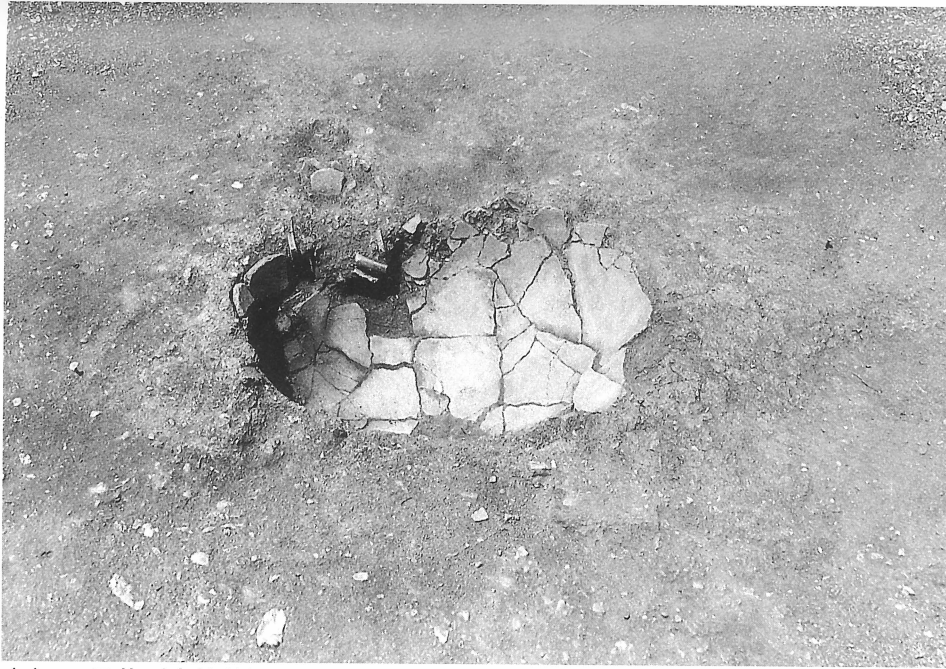
(2) 辻の西遺跡第2次調査発掘後 [西より]



(1) 辻の西遺跡第1次調査全景 [北より]



(1) 辻の西遺跡第2次調査全景 [南より]



(2) 25号墓 (甕棺墓)



(1) 甕棺墓、石棺墓、土墳墓



(4) 28号墓 (甕棺墓)



(3) 27号墓 (甕棺墓)



(2) 36号墓 (石棺墓)



(1) 34号墓 (石盖土坑墓)



(4) 39号墓 (土坑墓)



(3) 37号墓 (石棺墓)



(2) 42号墓 (石棺墓)



(1) 辻の西遺跡第2次調査 16、17、18号墳石棺墓、土壇墓



(4) 44号墓 (石棺墓)



(3) 43号墓 (石棺墓)



(1) 45号墓 (木棺墓)



(2) 中世溝 (SD07)

報 告 書 抄 録

ふりがな	つじ にしい せき							
書名	辻の西遺跡(第2次調査)							
副書名	福岡県八女市大字吉田字辻所在遺跡の調査報告書							
巻次								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第51集							
編著者名	赤崎敏男							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	834-8585 福岡県八女市大字本町647 TEL0943-23-1111							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ 市町村	ー ド 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
辻の西遺跡 第1次調査 辻の西遺跡 第2次調査	福岡県 八女市大字吉田 字辻	402109		33°13'45"	130°13'45"	昭和63年 9月28日 ～12月15日 平成9年 4月7日 ～7月6日	約3,000m ² 約3,000m ²	病院建設 病院建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物 特記事項				
辻の西遺跡 第1次調査	集落跡 墳墓	弥生時代 弥生時代 古墳時代	竪穴住居5 掘立柱建物4 溝5 甕棺墓3、土壙墓、石棺墓23 方形周溝墓10 円形周溝墓5 土壙3	弥生式土器 人骨、土師器、鉄器 土師器、鉄器、人骨 須恵器				
辻の西遺跡 第2次調査	墳墓	弥生時代 古墳時代 中世	甕棺墓9、土壙墓、石棺墓15 円墳1 円形周溝墓2 溝1 溝1	弥生式土器 土師器 弥生式土器 土師器、陶器				



辻の西遺跡

八女市文化財調査報告書
第51集

発行 八女市教育委員会
八女市大字本町647

印刷 東兄弟印刷
八女市祈祷院